

国指定記念シンポジウム

# 台渡里廃寺跡を考える

資料集



2006. 03. 25(土)

水戸市教育委員会・茨城県教育委員会



## シンポジウムプログラム

2006年3月25日(土)

10:00～10:10

開会の挨拶

10:10～11:00

基調報告Ⅰ 「東国の初期寺院と台渡里廃寺跡」

千葉大学文学部教授

岡本東三

11:00～11:30

基調報告Ⅱ 「範囲確認調査の成果」

水戸市教育委員会文化財主事

川口武彦

11:30～12:30

休憩(展示資料見学)

12:30～13:20

基調報告Ⅲ 「仲国から那賀郡へ」

茨城県埋蔵文化財指導員

川崎純徳

13:20～14:10

基調報告Ⅳ 「常陸の古代瓦」

茨城県立歴史館学芸第一室長

黒澤彰哉

14:10～15:00

基調報告Ⅴ 「郡寺の仏像」

茨城県文化財保護審議会委員

後藤道雄

15:00～15:15

休憩

15:15～16:30

総合討議／質疑応答

16:30

閉会の挨拶

## 資料集目次

---

基調報告 I 「東国の初期寺院と台渡里廃寺跡」	岡本東三	1~10
千葉大学文学部教授		
基調報告 II 「範囲確認調査の成果」	川口武彦	11~32
水戸市教育委員会文化財主事		
基調報告 III 「仲国から那賀郡へ」	川崎純徳	33~36
茨城県埋蔵文化財指導員		
基調報告 IV 「常陸の古代瓦」	黒澤彰哉	37~53
茨城県立歴史館学芸第一室長		
基調報告 V 「郡寺の仏像」	後藤道雄	54~59
茨城県文化財保護審議会委員		
台渡里廃寺跡関連文献		60~68

# 東国の初期寺院と台渡里廃寺跡

—台渡里廃寺に仏教の来た道のり—

岡本 東三

はじめに…瓦から台渡里廃寺の成立を読み解く

## 1. 日本最初の寺院—飛鳥寺一

- a. 蘇我氏の氏寺か……蘇我稲目：「西蕃の諸国、一は皆禮ふ。豈秋日本、豈獨り背かんや」
- b. 法師寺と尼寺……飛鳥寺—豊浦寺、法隆寺—中宮寺
- c. 「三宝興隆」詔……「諸臣連等、各君親の恩の為、競ひて仏舎を造る」(推古 2)  
寺—四六ヶ所 僧—816 人、尼—569 人 (推古 32)

## 2. 王權の寺

- a. 百濟大寺の成立の意味・舒明天皇「今年、大官及び大寺を作らしむ」  
大寺—大宮百濟 大寺→高市大寺→大官大寺→大安寺
- b. 「仏教興隆」詔……「凡そ天皇より伴作に至るまでに造るところの寺、造ること能はずは、朕皆助け作らしむ」(大化元)
- c. 山田寺式の成立……山田寺—蘇我倉山田石川麻呂(右大臣)  
安倍寺—安倍内麻呂(左大臣)
- d. 川原寺式の成立……南滋賀廃寺と大津宮(天智朝の大寺と大宮)

## 3. 国家仏教への道

- a. 天武朝の仏教政策……「諸国に、家毎に仏舎を作りて乃ち仏像及び経を置きて礼拝供養せよ」  
(天武 14) 『扶桑略紀』—692 カ寺(持統 6)
- b. 国家寺院の成立……藤原宮と京内寺院・平城京と南都七カ寺  
薬師寺・大安寺・元興寺・東大寺・西大寺・興福寺・法隆寺
- c. 僧尼令と寺院併合令…僧綱制度の確立と寺院統制策
- d. 「國分寺建立」詔……「天下の諸国をして毎国に法華経十部を写し、并せて七重塔を建てしむ」  
(天平 12)

## 4. 東国の初期寺院と台渡里廃寺

- a. 素弁系軒瓦の流入……宗元寺・寺谷廃寺・山王廃寺・淨法寺 7C II
- b. 山田寺式軒瓦の波及…影向廃寺・龍角寺・木下別所廃寺・上植木廃寺 7C III
- c. 川原寺式軒瓦の波及…上總大寺・下野薬師寺・寺井廃寺・上植木廃寺 7C III
- d. 紀寺式軒瓦の波及…二日市場廃寺・真行寺廃寺 7C III
- e. 織内系瓦当の在地化…新治廃寺・塔の前廃寺・台渡里廃寺・大久保領家廃寺 7C IV
- f. 平城宮式軒瓦の波及…上總國分寺・常陸國分寺・下野薬師寺 8C

おわりに…聖武天皇「三宝の奴」となる

(千葉大学文学部教授)

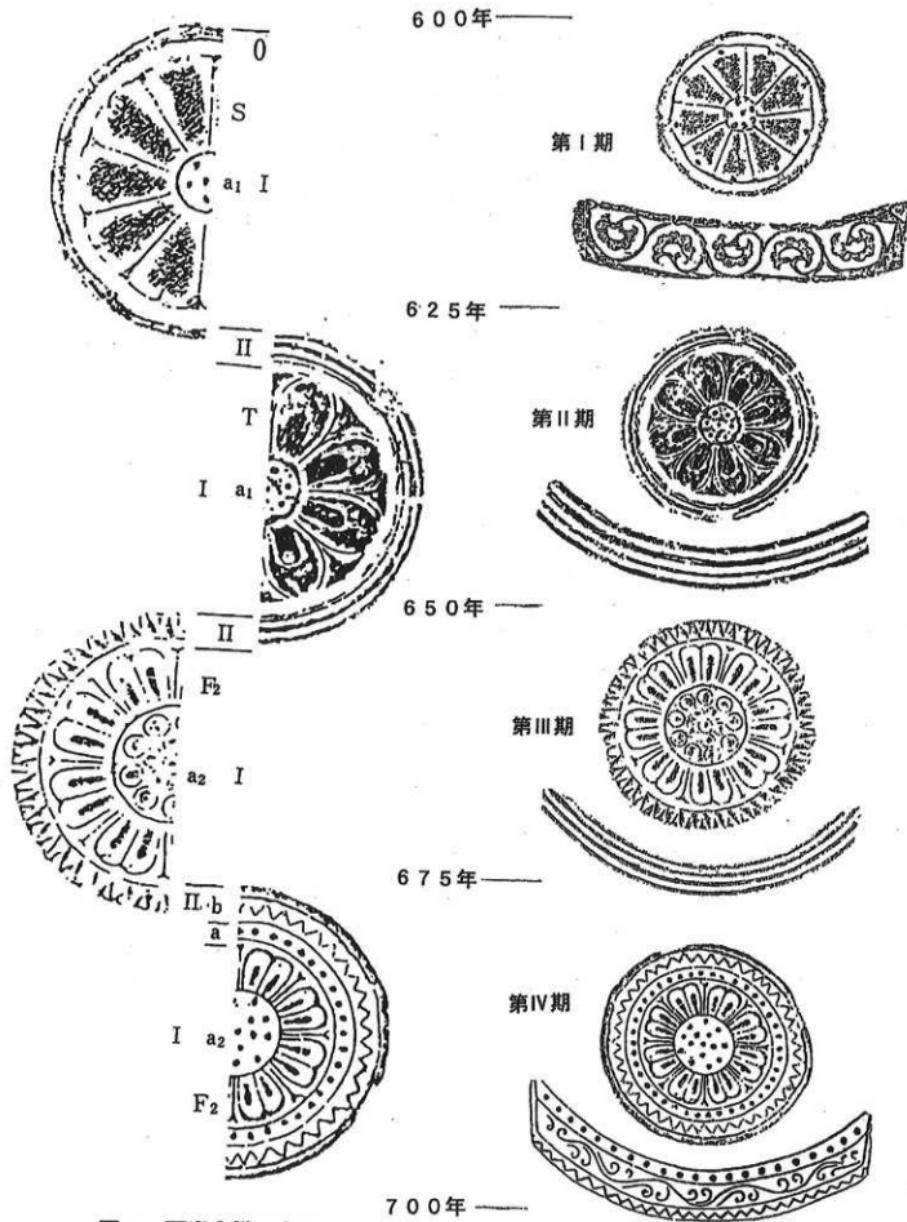
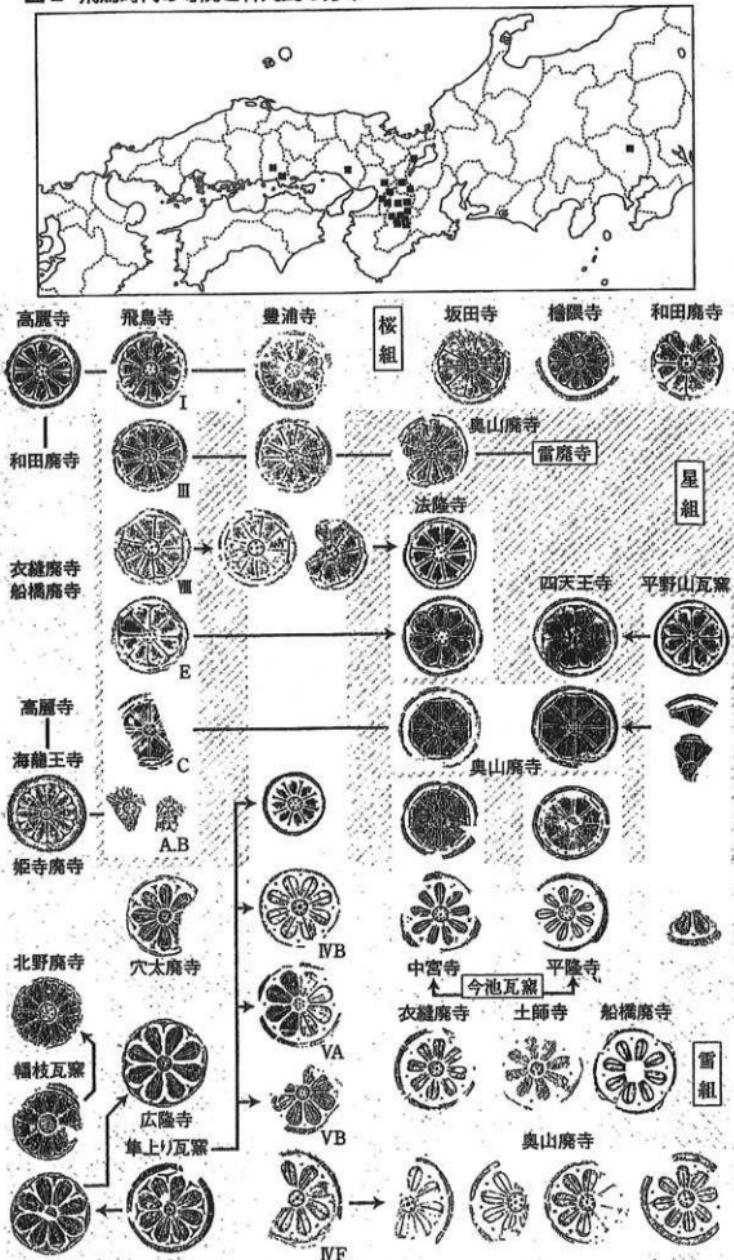
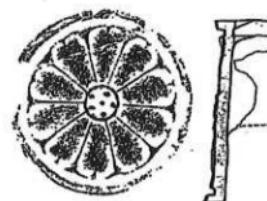
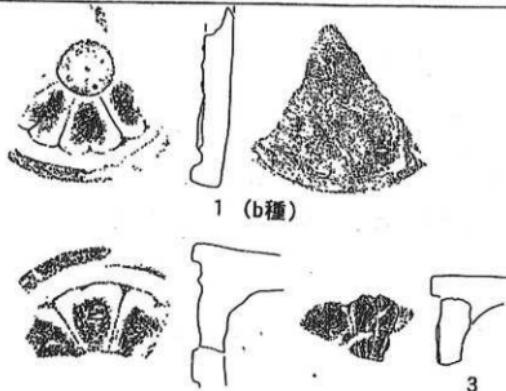


図1 瓦当文様の変遷

図2 飛鳥時代の寺院と軒丸瓦の分布

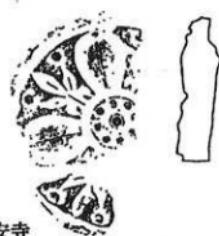
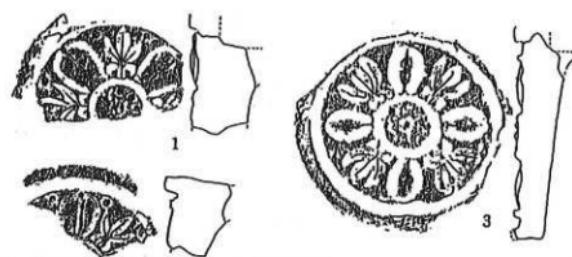


1. 寺谷廃寺（武藏）



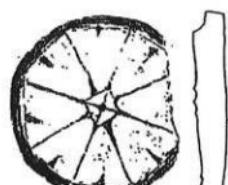
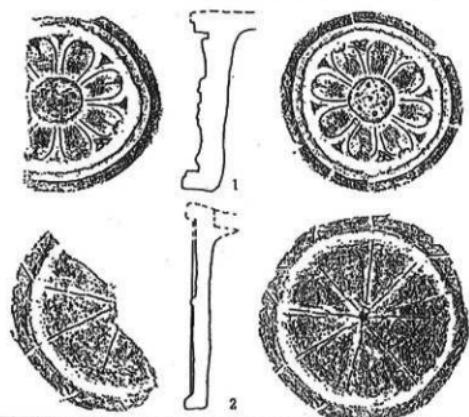
飛鳥寺

2. 宗元寺廃寺（相模）



西安寺

3. 山王廃寺（上野）



巨勢寺

図3 関東の素井系軒瓦

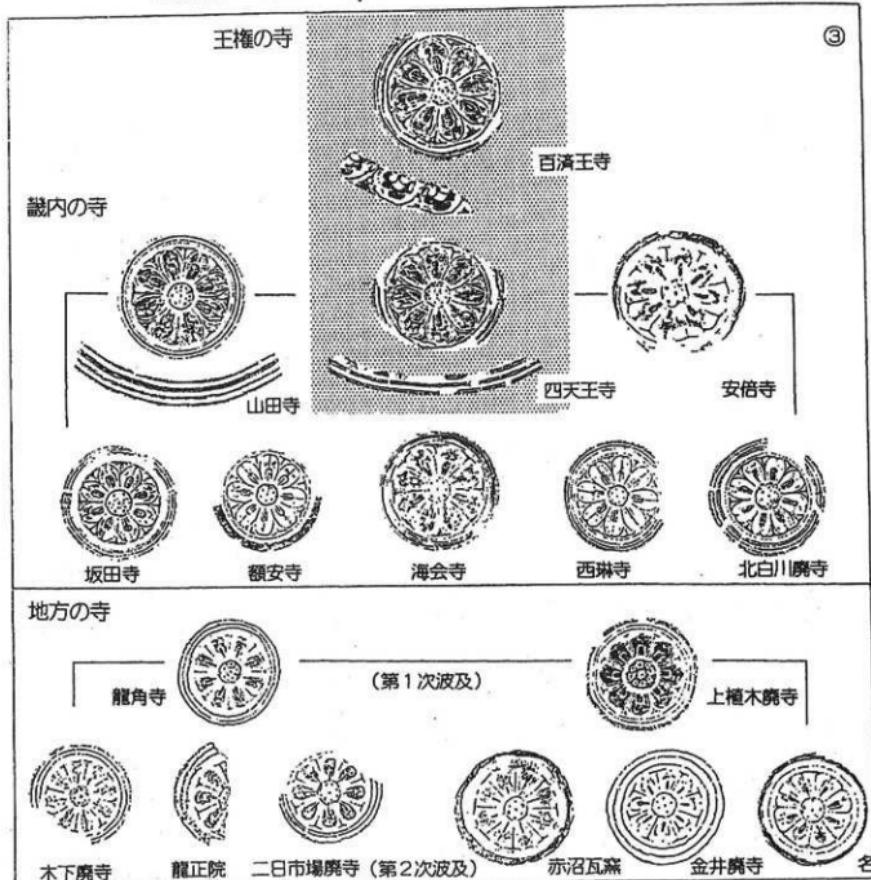
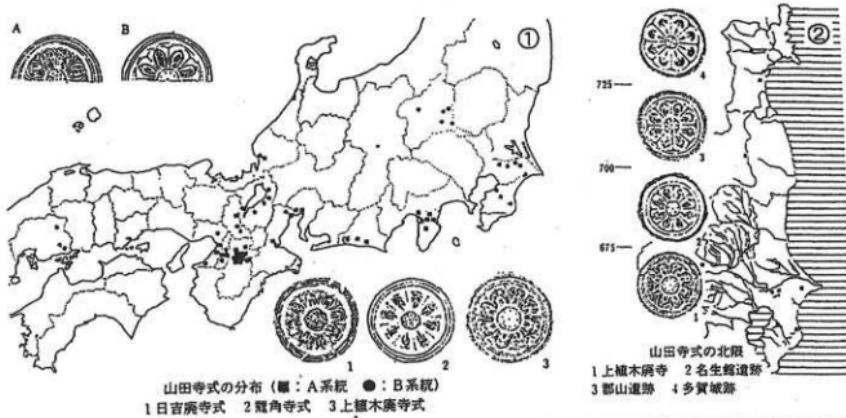
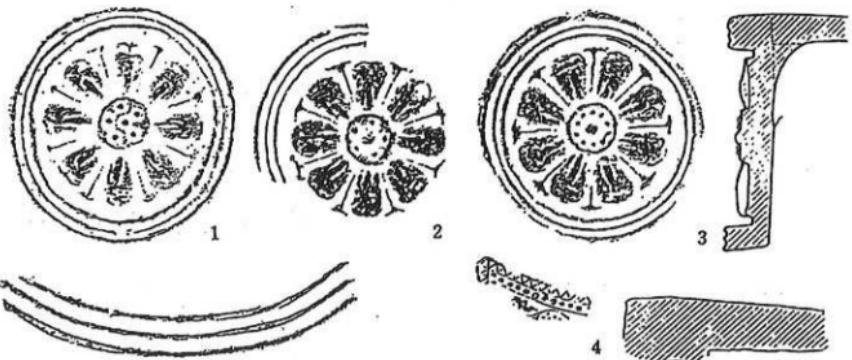
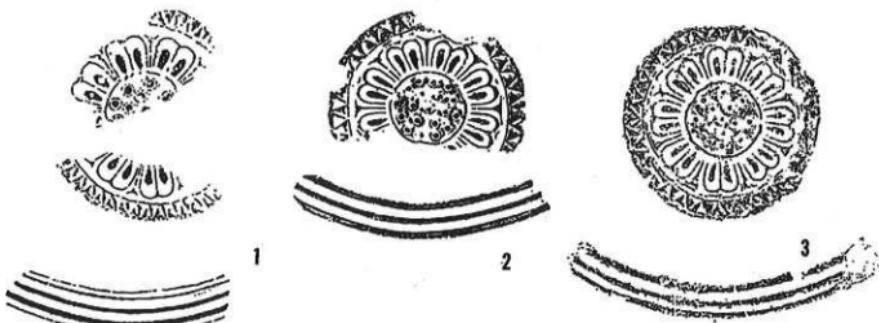


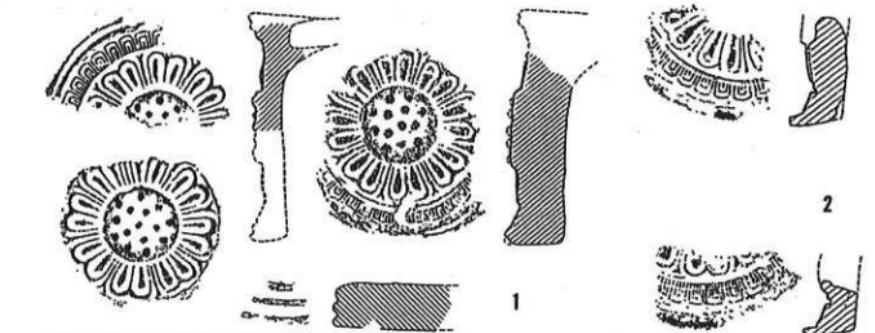
図4 山田寺式軒瓦の分布



山田寺式軒瓦（龍角寺）



川原寺式軒瓦（1.上総大寺・2.下野薬師寺・3.寺井庵寺）



記寺式軒瓦（1.二日市場庵寺・2.真行寺庵寺）

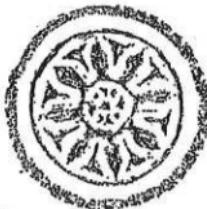
図5 関東の畿内系軒瓦



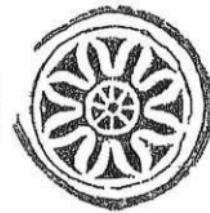
3101



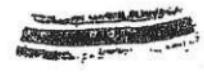
台波里庵寺



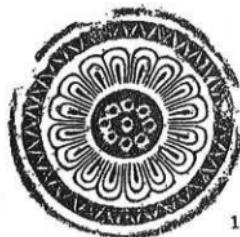
3103



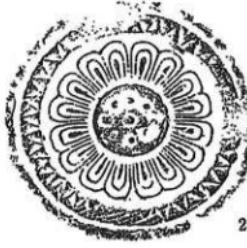
3127



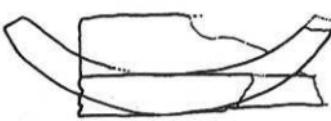
塔ノ前庵寺



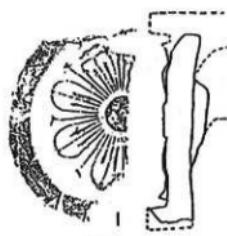
1



2



新治庵寺



(1101)



2



(1102)

大津庵寺

図6 在地化した畿内系瓦当

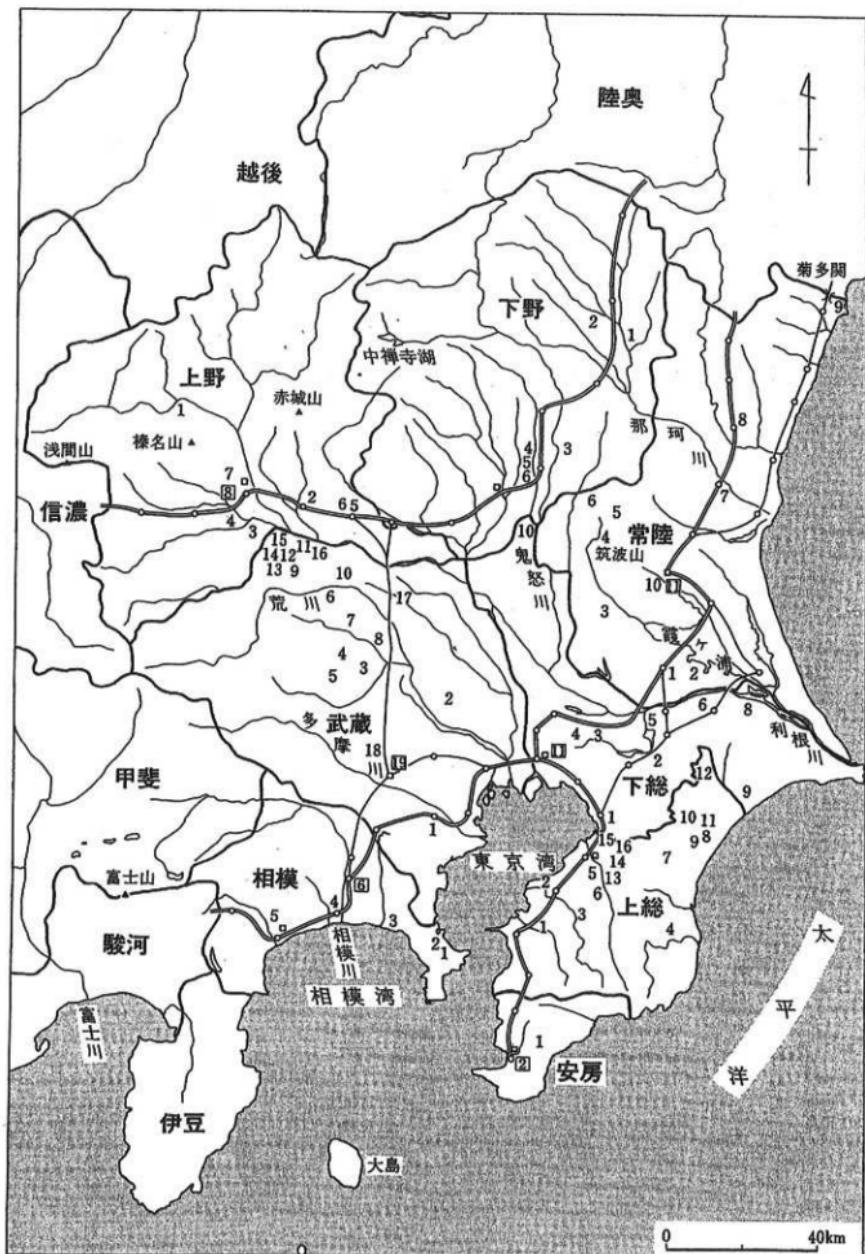
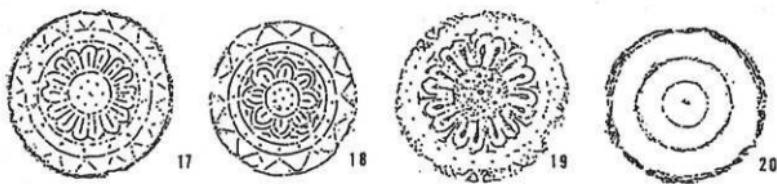
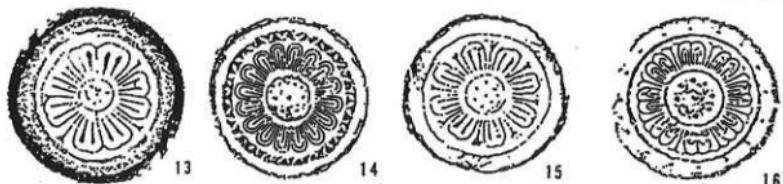
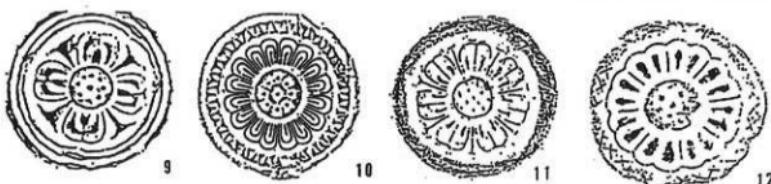
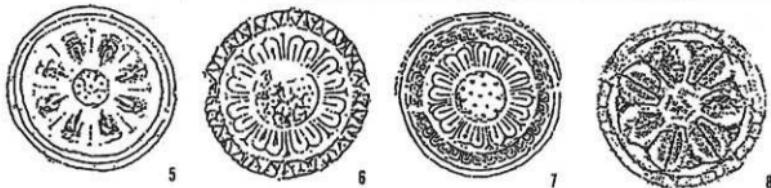


図7 東国の古代主要寺院の分布図

東國の古代主要寺院一覧

相 模			上 総			常 陸		
御浦	1	完元寺	周淮	1	九十九坊廃寺	信太	1	下君山廃寺
	2	深田廃寺	望陀	2	大寺廃寺	〃	2	塔の前廃寺
鎌倉	3	東千葉遺跡	畔蒜	3	真里谷廃寺	河内	3	九重廃寺
大住	4	四之宮廃寺	夷隅	4	法興寺(岩熊廃寺)	筑波	4	筑波廃寺
足下	5	千代廃寺	海上	5	今富廃寺	真壁	5	下谷貝廃寺
高座	6	相模国分寺 国分尼寺	〃	6	二日市場廃寺	新治	6	新治廃寺
武 藏			山辺	7	大椎廃寺	那賀	7	台渡廃寺
橘樹	1	影向廃寺	武射	8	真行寺廃寺	久慈	8	長者屋敷遺跡
足立	2	大久保領家廃寺	〃	9	湯坂廃寺	多珂	9	大津廃寺
高麗	3	女影廃寺	〃	10	横宿廃寺	茨城	10	茨城廃寺
〃	4	大寺廃寺	市原	11	小川廃寺	〃	11	常陸国分寺 国分尼寺
〃	5	高岡廃寺		12	山田廃寺			
比企	6	寺谷廃寺		13	武士廃寺			
	7	小用廃寺		14	千草山廃寺			
入間	8	勝呂廃寺		15	光善寺廃寺			
男衾	9	諦光寺廃寺		16	菊間廃寺			
〃	10	寺内廃寺		17	上総国分寺 国分尼寺			
樺沢	11	岡廃寺	下 総			上 野		
〃	12	馬騎の内廃寺	千葉	1	千葉寺	吾妻	1	金井廃寺
那珂	13	大仏廃寺	〃	2	長熊廃寺	佐位	2	上植木廃寺
児玉	14	城戸野廃寺	印旛	3	木下別所廃寺	多胡	3	でえせえじ遺跡
賀美	15	五明廃寺	〃	4	大塚前遺跡	新田	4	馬庭東遺跡
幡羅	16	西別府廃寺	埴生	5	龍角寺	5	寺井廃寺	
埼玉	17	旧盛徳寺	香取	6	名木廃寺	6	入谷遺跡	
多摩	18	深大寺	〃	7	龍正院	群馬	7	山王廃寺
〃	19	武藏国分寺 国分尼寺	海上	8	木内廃寺		8	上野国分寺 国分尼寺
安 房			匝瑳	9	八日市場大寺廃寺	下 野		
朝夷	1	増間廃寺	結城	10	結城廃寺	那須	1	草の尾遺跡
安房	2	安房国分寺	葛飾	11	下総国分寺 国分尼寺	〃	2	淨法寺廃寺
			〃			芳賀	3	大内廃寺
						河内	4	上神主廃寺
						〃	5	多功遺跡
						〃	6	下野薬師寺
						都賀	7	下野国分寺 国分尼寺



- |                           |          |           |             |
|---------------------------|----------|-----------|-------------|
| 1. 寺谷廃寺                   | 2. 浄法寺廃寺 | 3. 山王廃寺   | 4. 宗元寺      |
| 5. 龍角寺                    | 6. 上経大寺  | 7. 二日市場廃寺 | 8. 深田廃寺     |
| 9. 九十九坊廃寺                 | 10. 新治廃寺 | 11. 山王廃寺  | 12. 大久保横家廃寺 |
| 13. 千葉寺                   | 14. 九重廃寺 | 15. 武士廃寺  | 16. 千代廃寺    |
| 17. ~19. 下野葛師寺(17. 津口廃寺祐) |          |           |             |
| 20. 上経圓分寺                 |          |           |             |

図8 東国の軒瓦編年

## 範囲確認調査の成果

川口 武彦

### I. 台渡里廃寺跡とは？

台渡里廃寺跡（だいわたりはいじあと）は那珂川右岸の標高 30mの台地上に所在する古代の寺院と役所が複合した遺跡であり（第1図・第2図）、北から長者山（ちょうじややま）地区・観音堂山（かんのんどうやま）地区・南方（なんぼう）地区の3地区に分けられている（第2図・第3図）。

当遺跡は、高井悌三郎（たかいていざぶろう）氏（故人）による学術調査が昭和14年から昭和18年にかけて行われ、その調査成果を受けて、昭和20年7月16日付けで茨城県の史跡指定を受けている。

その後、昭和40年代後半に水戸市教育委員会が3地区の範囲を確認する発掘調査を行ったが（瓦吹 1988, 1989, 1991），正式報告が未刊のまま徐々に宅地化が進行していった。

平成7年に観音堂山地区と南方地区の間に都市計画道路が開通すると（井上・千葉 1995），さらに都市化の波が押し寄せてきた。こうした開発の波から史跡を保護して行くために、水戸市教育委員会では平成14年から16年にかけて観音堂山地区と南方地区を対象に史跡の内容と範囲を確認するための国・県費補助による発掘調査を行い、平成17年3月に範囲確認調査報告書を刊行した（川口・小松崎・新垣編 2005）。

その成果に基づき、平成17年7月14日付けで観音堂山地区と南方地区の県指定地を含む約33,000 m<sup>2</sup>の範囲が国の史跡指定を受けることとなった（写真1）。

県の史跡指定から国の史跡指定を受けるまでに60年の歳月を経たが、以下では、平成14年から平成16年度にかけて水戸市教育委員会が実施した範囲確認調査の成果の概要を報告する。

### II. 南北2つの古代寺院

平成14年～平成16年に実施した範囲確認調査により、観音堂山地区と南方地区は両地区とも古代の寺院跡であることが判明し、北側の観音堂山地区の寺院が7世紀後半の白鳳時代（はくほうじだい）に創建された初期寺院であること、南側の南方地区の寺院は9世紀後半の平安時代に入ってから造営されたことが明らかとなった。

観音堂山地区の寺院と南方地区の寺院が同じ寺であるのか否かは判然としないが、観音堂山地区の寺院の主要伽藍は、火災により焼失していることが確認され、火災の規模から同地に再建せずに南へ移動して再建されたと考えるのが現状では自然である。

わずか150mの距離の間に2つの古代寺院が営まれている例は、県内においても広く東国を見渡しても確認されておらず、台渡里廃寺跡の特殊性として評価できる。二つの本格的な伽藍を持った寺院を建立するには相当な財力を要したはずであり、そのことは、台渡里廃寺跡の置かれた那賀郡が22の郷から成る大郡であったこと（第9図）、諸代郡司層と考えられる宇治部直のような有力豪族が支配していたことと無関係ではないだろう。

### III. 特異な伽藍配置の初期寺院

7世紀後半に創建された観音堂山地区の初期寺院はこれまであまり知られていないような特異な伽藍配置であった。そのことから、役所の一部ではないかとも推定されたこともあった。

しかし、範囲確認調査の結果、仏教に関連する遺物が豊富に出土すること、役所に関連するような造構や遺物が見つからなかったことから寺院跡であることが確実となった。

観音堂山地区は、東西 126m、南北 156m の範囲の寺院地をもつていて推定され、その内側から計 6 棟の礎石建物が確認された(第 6 図、第 2 表)。

各礎石建物の基壇や掘り込み地業と呼ばれる基礎の部分的な断ち割り調査を実施したところ、基礎の中にも瓦が含まれている礎石建物と含まれていない礎石建物が存在することが判明し、観音堂山地区の主要伽藍には新旧関係が存在することが明らかとなつた。基礎の中における瓦の有無とその種類からは次のような変遷過程が追え、3 時期の造営過程を推定している(第 6 図)。

観音堂山Ⅰ期 基礎の中に瓦を含まない一群(7世紀第IV四半期…講堂、金堂、中門)

↓

観音堂山Ⅱ期 基礎の中に格子叩きの平瓦を含む一群(8世紀第I四半期…塔)

↓

観音堂山Ⅲ期 基礎の中に長縄叩きの平瓦を含む一群(8世紀第III四半期…経蔵／鐘樓、性格不明建物)

観音堂山地区の初期寺院の伽藍配置は、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼に比定される礎石建物が、塔の南には金堂と同規模の性格不明建物が、講堂の対極に位置するところには中門とみられる礎石建物が配置される特異なものである(第 6 図)。

西側に東面する講堂が配置され、その北東に南面する金堂と塔が並置される点は一見、三重県名張市の国指定史跡夏見廃寺跡や岡山県津市久米廃寺の伽藍配置に類似しているように見えるが、夏見廃寺や久米廃寺の場合は、金堂と塔のすぐ北側に急斜面が迫っており、南側も谷が広がる狭い空間しかなかったことから、伽藍を営む際には大きな地形的制約があったと考えられる。

他方、台渡里廃寺跡の地形は、講堂や経蔵／鐘楼、金堂が置かれている中央部分が最も高く、周囲が低い谷状の地形になっていることが地形測量図からも読みとれ、発掘調査の結果、講堂や経蔵／鐘楼、金堂の営まれている場所と南側では関東ローム層上面の検出深度に約 1.7m の差があることが判明している。そして伽藍の造営に伴い、この低い南側の谷部を版築状の整地層により埋めて、中央部との高さを揃えていることが判明した。整地は礎石建物の造営と並行して行われており、東西約 90m、南北約 58m にもわたる大規模なものである。これほどの整地が行なわれている古代寺院は常陸国内だけでなく広く東国を見渡しても確認されていない。

整地層は断ち割り調査の結果、ローム土や粘土、黒色土を互層に積み上げたもので、深いところでは 1.2m も積み上げられている状況が確認されている。また、整地層には瓦を含む場所と含まない場所があり、一時期に行なわれたものではなく、創建期から徐々に拡大していく可能性が高い。

観音堂山地区の初期寺院が「〇〇寺式」といったような規則的な伽藍配置を探らなかつた背景にはこのような地形的な制約が大きく関与していたと考えられる。また、南向きではなく東向きの寺院となった背景には古代東海道の存在を考慮する必要がある。木下 良氏は古代東海道の推定駅跡が観音堂山地区的南東方向を走っていることを指摘されており(木下 1984, 1988), 駅跡から見える景観も配慮された結果ではないだろうか。

#### IV. 造営が途中で停止した法隆寺式伽藍配置の寺院

南方地区については、戦前の高井悌三郎氏の発掘調査で塔跡が確認されていたことから、ここを那賀郡

の郡寺である「徳輪寺」とし、法隆寺式伽藍配置の寺院であったとする見解もあった（伊東 1972、瓦吹 1991）。

平成 16 年度に実施した南方地区の範囲確認調査および市道改良工事に伴う発掘調査（土生・川口・新垣 2005）を通じて、中央に塔と考えられる SB001 と金堂と考えられる SB002 が配置され、それを取り囲むように東西 107m、南北 110m の範囲に幅 3m ほどの伽藍地を区画する溝（北側及び西側の溝は未確認。南側は途中で途切れている）が巡っていることが確認された。さらにその外側には、東西 240～220m、南北 210m 以上の範囲に寺院地を区画する溝（南側の溝は未確認）が巡っており、観音堂山地区の初期寺院を凌ぐ広大な面積を持つ古代寺院であることが明らかとなった（第 8 図）。

塔跡は北西隅が農業用水の攪乱により破壊されているが、10m 四方の正方形の基壇を持つ（第 8 図）。基壇の断ち割り調査を実施したところ、掘り込み地業基底部から基壇最上面まで深さ 1.9m の版築（はんちく）が行われていること、地上式心礎であり、心礎は破壊され抜き取られていることが判明した（第 8 図）。塔基壇の中からは、平安時代の土器の破片が出土し（第 3 表）、さらに寺院地内に 9 世紀第 I 四半期～9 世紀第 III 四半期の遺物が出土する豊穴住居跡が営まれていることから、その造営時期は 9 世紀第 III 四半期以前に遡ることはないと考えられる。

金堂は昭和 47 年の調査時にも確認されていたが、耕作による攪乱が著しく、掘り込み地業の基底部しか確認できなかった。著しい攪乱により基礎の平面形状も確認することが困難であったが、南北距離が 7.2m であることは確定した。しかしながら、東西方向については攪乱により掘り込み部が残存していないことから、9.0m 以上 12.0m 以内であるとしか推定出来なかった。基礎の中には遺物を含んでおらず（第 3 表）、周囲からの瓦の出土量は極めて零細であったうえに、版築も基底部のみしか確認されず、その塗き方も粗雑であったことから基壇工事が完成していなかった可能性が考えられる。

塔の基壇上からは須恵器（すえき）製の擦管（さっかん）の一部とみられる破片が出土したことから、相輪部まで完成していた可能性が考えられるが、瓦の出土量は金堂と同様、極めて零細であり、総瓦葺きでなかつたか、瓦を葺いている途中で何らかの理由により造営が停止した可能性が高い。講堂推定位置の調査で礎石建物が確認されなかったこともそれを示唆するように思われる。

また、伽藍地を区画する溝についても昭和 46 年の発掘調査で南側と東側の溝が部分的に確認されていたが、今回の調査では北側および西側の溝は確認されず、南側の溝も途中で掘削が終了し、人為的に埋め戻されている状況が確認された。

これらの諸点を総合すると、南方地区的寺院は法隆寺式伽藍配置を意識していたものの、伽藍の完成を見ないで、造営が途中で停止した可能性が浮上してくるのである。

寺院地を区画する溝については、東西とも人為的な埋め戻しが行われている状況が確認され、9 世紀後半や 11 世紀代の土器類が上部に堆積していたことから、比較的短期間のうちに造営が停止した状況が想定される。伽藍の中心から東西の寺院地を区画する溝までの距離は 110～120m であり、両溝とも概ね並行しているが、北側の溝が北東方向から南西方向に大きく傾いている（第 7 図）。この背景には、北側に観音堂山地区の寺院地を区画する溝が既に存在しており、また、北西部には大きな谷津が広がっていることから、それらを避けるために意識的に主軸を変えるという意図があったと考えている。

## V. 豊富な仏教関連遺物

発掘調査で出土した遺物の 9 割は瓦であり、その总数は破片にして 20 万点にも上る。瓦の中でも目を引くのは軒先に飾られる軒丸瓦であり、観音堂山地区と南方地区から約 40 種類が確認されている（第 10 図～11 図）。これほど多くの異なる文様を持つ軒丸瓦がひとつの寺院跡から出土する例は、広く関東を見回しても確認されていない。

また、台渡里廃寺跡を特徴づける遺物に文字瓦がある。観音堂山地区および南方地区的文字瓦は平瓦や丸瓦の凹面や凸面に「吉(土)田」や「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志口」など台渡里廃寺跡の造営に関与した古代常陸国那賀郡の郷名や「牛足」のような個人名がヘラ書きされたものや「川マ」や「禾」、「石上」銘の押印であり(第12図)、これらは台渡里廃寺跡や古代常陸国那賀郡の成り立ちやあゆみを考えるにあたって看過できない極めて重要な文字資料である。同様の文字瓦は、筑西市の新治廃寺跡からも出土しているが、台渡里廃寺跡の場合は寺院である観音堂山地区と南方地区だけでなく、役所の倉庫群が見つかっている長者山地区からも人名や地名が書かれた文字瓦が出土する点で大きく異なっており、出土量だけを取り上げれば県内で最も多く文字瓦が出土している遺跡ということになる。

また、観音堂山地区の初期寺院の講堂および経蔵／鐘樓からは「徳輪寺」とヘラ書きされた文字瓦が出土しており(第12図-1・13)、過去に観音堂山地区西側に所在する畠地からも「仲寺」と墨書きされた平安時代の土器(第13図-1)が採集されている(佐藤 1967)。

「徳輪寺」は仏教の名で呼ばれた寺院名、すなわち造寺の主旨に因んだ法号であり、「仲寺」は所在地の名前で呼ばれた通称・俗称と考えられる。

常陸国内の古代寺院をみると、筑西市の新治廃寺跡(にいはりはいじあと)からは「新治寺」や「大寺」とヘラ書きされた文字瓦(高井 1944, 1985a)が、石岡市の茨城廃寺跡(ばらきはいじあと)からは「茨木寺」や「茨寺」と墨書きされた平安時代の土器(小笠原・黒沢・稻子谷・川村 1982)が、常陸太田市の長者屋敷遺跡(ちょうじややしきいせき)からは「久寺」と墨書きされた平安時代の土器(矢ノ倉 1997)が出土している(第14図)。

しかし、いずれも通称・俗称か「尊称」(三舟 2003)のいずれかが判明している例であり、仏教の名で呼ばれた名前が判明している例はないのである。そのような点からも台渡里廃寺跡はこの両方が判明している貴重な事例ということができる。

「仲寺」と墨書きされた平安時代の土器は、台渡里廃寺跡が「郡寺」や「郡名寺院」、「郡衙周辺寺院」(山中 1994, 2005)であることを示唆する重要な遺物である。佐々木義則氏が復元した奈良・平安時代の那賀郡の郷と遺跡の位置を示した図(第9図)によると、台渡里廃寺跡は那賀郡の中心にある那珂郷に位置していたようである。

奈良・平安時代の那賀郡内においては、台渡里廃寺跡の他に田谷廃寺跡、薬師平遺跡や村落内の仏堂の可能性が考えられる藤田千軒遺跡、有賀宿遺跡のように複数の寺院跡およびその可能性がある遺跡が確認されているが、いずれの寺院も奈良時代以降の造営と考えられ、台渡里廃寺跡の造営以前に創建された例は確認されていない。このように台渡里廃寺跡が郡の名前で呼ばれた背景には、那賀郡内において最初に造営された初期寺院であることと郡衙が置かれた郡名郷(平川 2005)に造営されたという立地条件が保っていたと考えられる。

その他にも塔の上に飾られる相輪の一部が描かれた瓦(本冊子の表紙)や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦(第12図-11・14)、香炉形土器(こうろがたどき)、内外面に漆が塗られた鉄鉢形土器(てっぱつがたどき)、金箔製品などが出土しており、過去の調査においても仏像の鋳型や瓦製の相輪(そうりん)の請花(うけばな)と擦管(さっかん)など東国の初期寺院でも初めて見つかった重要な仏教関連遺物が確認されている(瓦吹 1988, 川口 2004b)。

塔の上に飾られる相輪の一部が描かれた瓦は擦管と九輪と請花がヘラ状の工具により描写されたものであり、相輪部のみを強調したものとしては全国的にも初めての出土例となる。

香炉形土器は、高壇状脚部の上の皿面に渦巻き状の溝を持つものであり、関東の初期寺院における出土例としては初見の例となる。漆が塗られた鉄鉢形須恵器も全国的に出土例が極めて少なく、兵庫県芦屋市の中尾廃寺跡第75地点、京都府の志水廃寺跡の例が知られている程度である。

金箔製品は東側の寺院地区画溝の内側にある溝跡の上面から検出されたものであり、土製品の平坦面

に金が付着しているものと、炭化材に付着していた漆膜に金が付着している資料の2つがある。国立歴史民俗博物館の永嶋正春助教授による分析の結果、金とともに微量であるが鉛も検出されており、乾漆像(かんしつぞう)と呼ばれる仏像の一部であった可能性がある。

瓦製相輪の一部と思われるものは、台渡里廃寺跡と関連の深い那賀郡内の生産遺跡においても出土しており、木葉下窯跡群三ヶ野支群瓶焼土第2号窯跡(あばっけかまとぐんみかのしぐんかめやきどいにごうかまと)からは瓦製の水煙が、高取山支群A地点灰原(たかとりやましぐんえーちんはいばら)からは九輪(くりん)とみられる破片が出土しており、山田窯跡群(やまだかまとぐん)からも伏鉢(ふくばち)の破片が出土している。これらの資料は観音堂山地区と南方地区の塔跡の造営や補修とも係わる重要な遺物である。

## Ⅶ. 寺院の荒廃

以上の成果からも明らかのように台渡里廃寺跡は常陸國のみならず東國の初期寺院の中でも特異な存在である。では台渡里廃寺跡はいつ頃、廃寺になったのだろうか。

観音堂山地区の初期寺院の南側には、土壘が部分的に残存しており、その内側に土壘に沿う形で礎石を落とし込んだ溝が確認された。この溝の中からはカワラケや内耳土器と呼ばれる中世の土器が出土したことから、中世には寺院としての法灯を保っておらず、近隣にある長者山城の一帯として利用された可能性が高いことが判明した。

平成6年に実施された都市計画道路3・6・30号線敷設に伴う発掘調査で観音堂山地区の寺院地内から検出された第一号井戸址からは、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器、擂り鉢などが出土しており(井上・千葉 1995)，少なくともそれ以前には寺院としての機能は失われていたと考えられる。

南方地区の寺院については、寺院地内に10世紀第II四半期や10世紀前葉の土器が出土している堅穴住居跡が営まれていることが確認されており、人為的に埋め戻しが行われた東西の寺院地区画溝の覆土上層からは9世紀後半の土器、11世紀後半の土器がまとめて出土している。このことから、9世紀の第IV四半期～10世紀の第I四半期には南方地区の寺院も廃絶していた可能性が高い。

南方地区の塔跡基壇上およびその周辺からは、中・近世の土器類とともに五輪塔の部材、板碑の破片などが出土しており、基壇の南側には「咸平元寶」などの北宋錢や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認された(第8図)。そのことから、中・近世には塔跡が信仰の対象となっていたり、墓域としての土地利用が行われていたことが推察される。

このように台渡里廃寺跡は平安時代の半ばには寺院としての機能を停止し、中世以降には城館の一部や墓域として異なる土地利用が展開していた。そして観音堂山という地名で今日に寺院の存在が知られるようになったと考えられる。

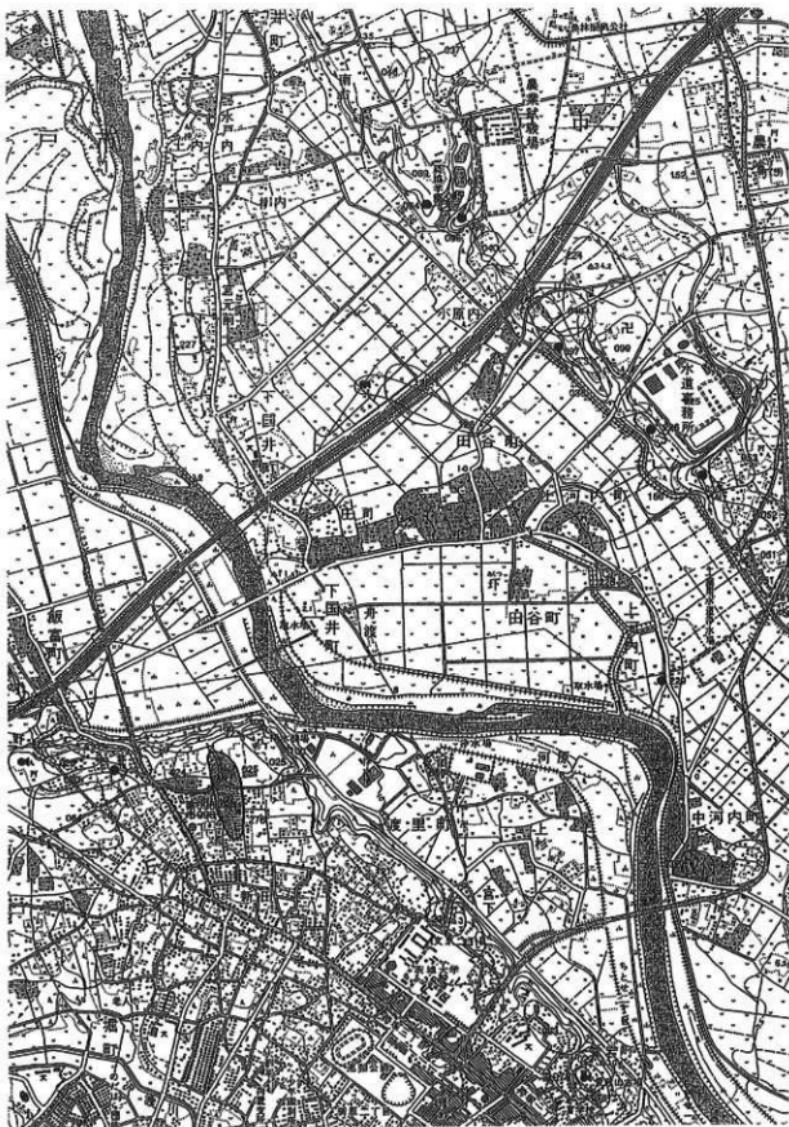
(水戸市教育委員会文化財主事)

## 引用文献

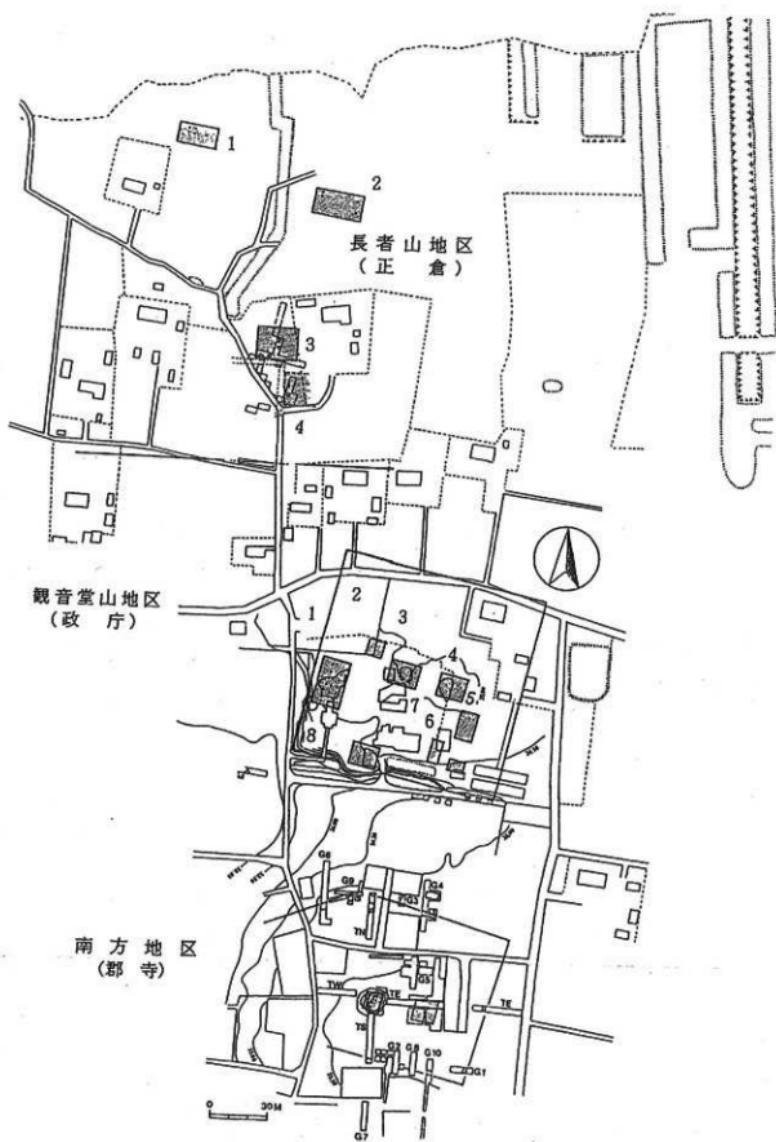
- 伊東重敏 1972 「奈良時代の水戸－台渡里廃寺跡の瓦」『水戸の文化財拾遺』No.1 水戸市教育委員会社会教育課  
井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里廃寺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台  
渡里廃寺跡発掘調査会  
茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』  
小笠原好彦・黒澤彰哉・稻子谷知子・川村浩司 1982 『茨城廃寺跡III IBARAKI TEMPLE SITE(茨木寺)』茨城県石岡  
市教育委員会  
川口武彦 2005 「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院－国指定史跡「台渡里廃寺跡」範囲確認調査成果を中心に  
一」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心に－』独立行政法人文化財研究

所奈良文化財研究所

- 瓦吹 塞 1988 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅰ—仏像范型を中心として—」『Shell Mound』3 東日本考古学同人会  
1989 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅱ—第2号住居跡を中心として—」『史峰』14 新進考古学同人会  
1991 「水戸市台渡里廃寺覚書Ⅲ—觀音堂山・南方・長者山地区の性格について—」『婆良岐考古』13  
婆良岐考古同人会
- 木下 良 1984 「常陸国古代駅路に関する一考察」『國學院雑誌』85-1 國學院大學  
1988 「計画的古代道の復元—常陸国を事例に—」『第二回シンポジウム常陸の道—常陸国における交通体系の歴史的変遷—』岩崎宏之・常總地城史研究会
- 佐々木義則 2000 「I 遺跡の概要 2 歴史的環境 —奈良・平安時代—」『武田石高遺跡 奈良・平安時代編(第1分冊)』ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 佐藤次男 1967 「水戸市台渡里廃寺址の土師器」『茨城県の土師器集成』第1集 茨城考古学会  
高井梯三郎 1944 『』  
1959 「常陸台渡里廃寺出土の文字瓦」『史迹と美術』29-8 史迹と美術同攷會  
1964 『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 土生朝治・川口武彦・新垣清貴 2005 『台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—』水戸市教育委員会
- 平川 南 2005 「古代の文字からみた郡家と集落」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸國河内部を中心として—』茨城県考古学協会
- 三舟隆之 2003 『日本古代地方寺院の成立』吉川弘文館
- 矢ノ倉正男 1997 『茨城県教育財团文化財調査報告第117集 主要地方道常陸郡那珂港山方線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 長者屋敷遺跡』茨城県、財団法人茨城県教育財團
- 中山敏史 1994 「第三章 古代地方官衙の成立と展開 第二節 評衡・郡衙成立の歴史的意義(二)評衡・郡衙周辺寺院の性格」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房  
2005 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題—氏寺論の再検討—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所



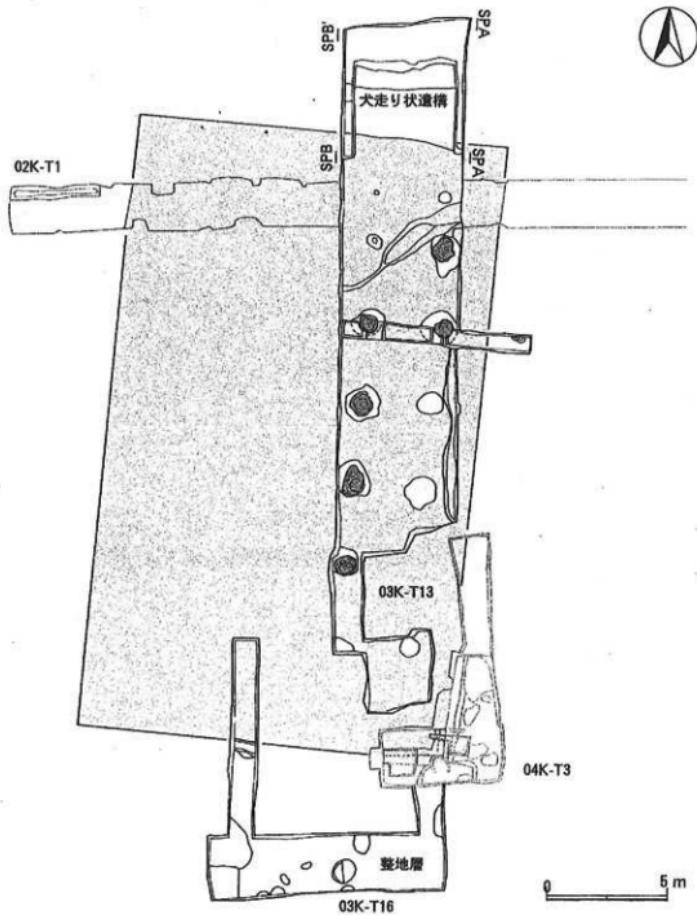
第1図 台渡里庵寺跡(098番)と周辺の遺跡(S=1:25,000)



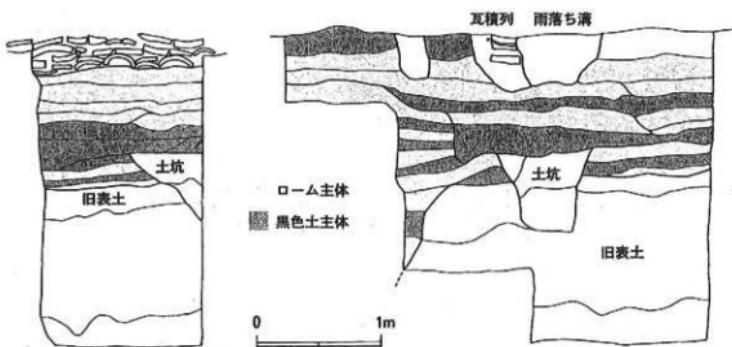
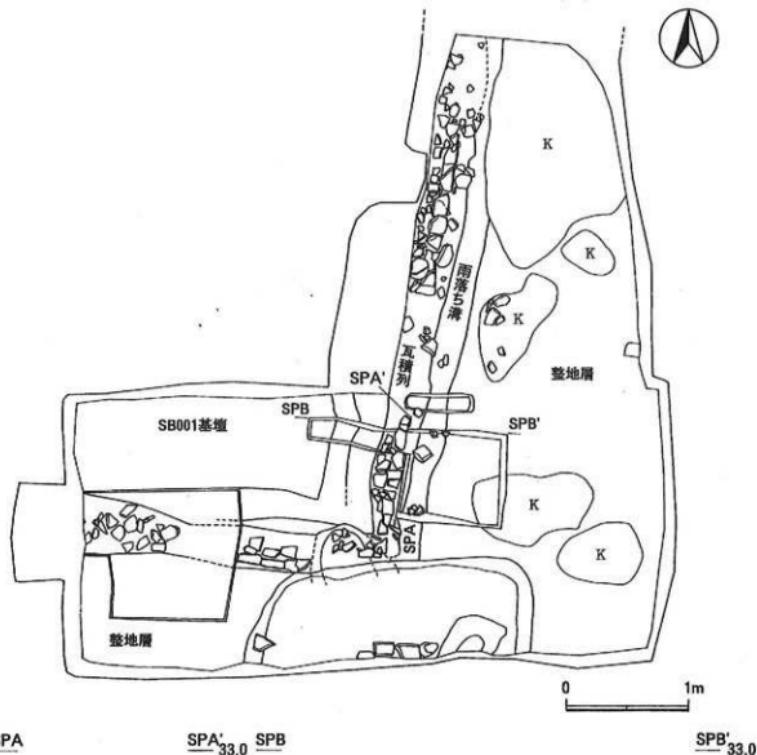
第2図 台渡里廃寺跡の構成 (S=1:3,000)



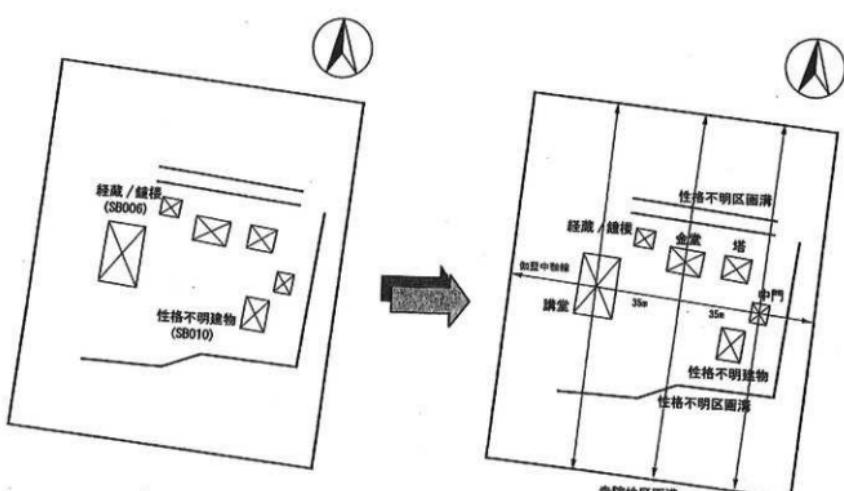
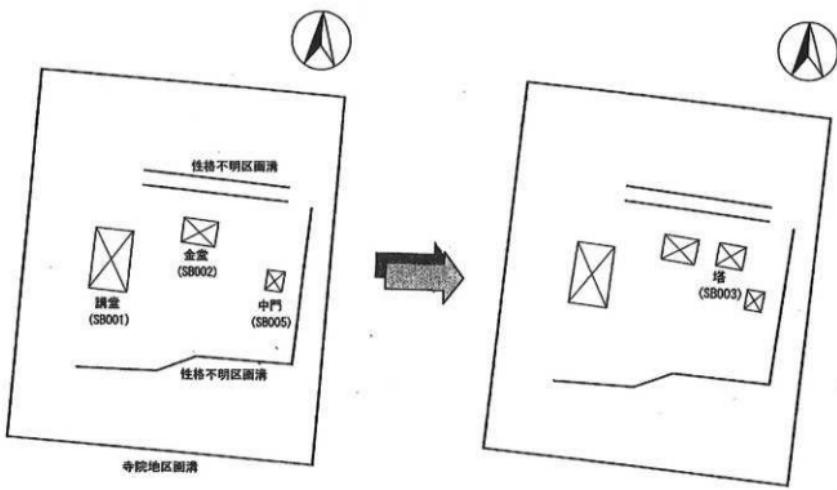
第3図 観音堂山地区と南方地区の調査位置 ( $S=1:2,000$ )



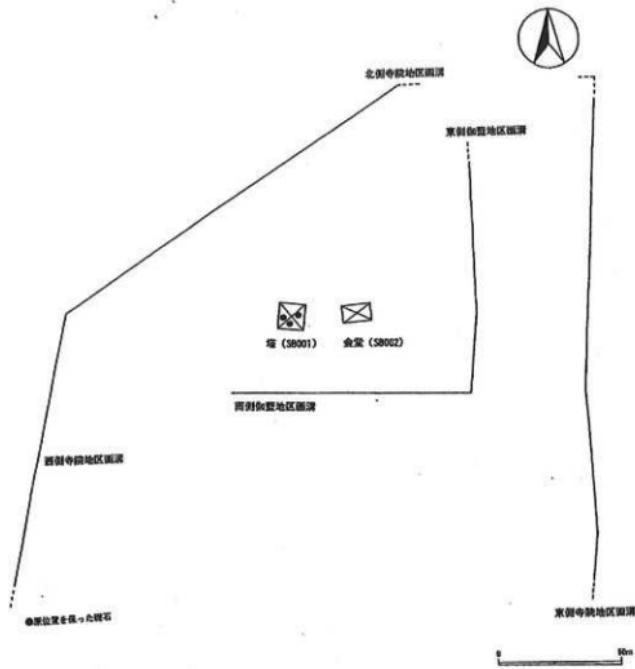
第4図 観音堂山地区講堂(SB001)平面図(川口・小松崎・新垣編 2005より転載)



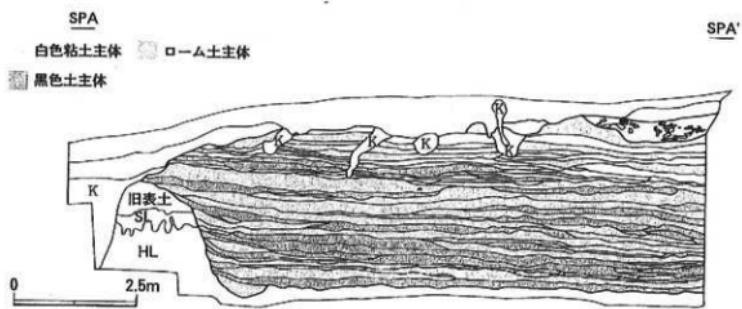
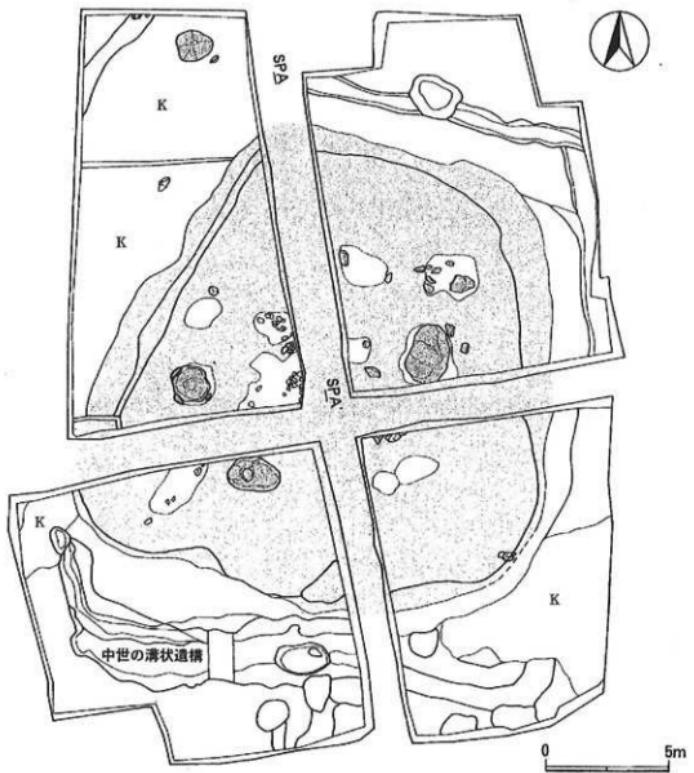
第5図 鏡音堂山地区講堂(SB001)瓦積み遺構(川口・小松崎・新垣編 2005より転載)



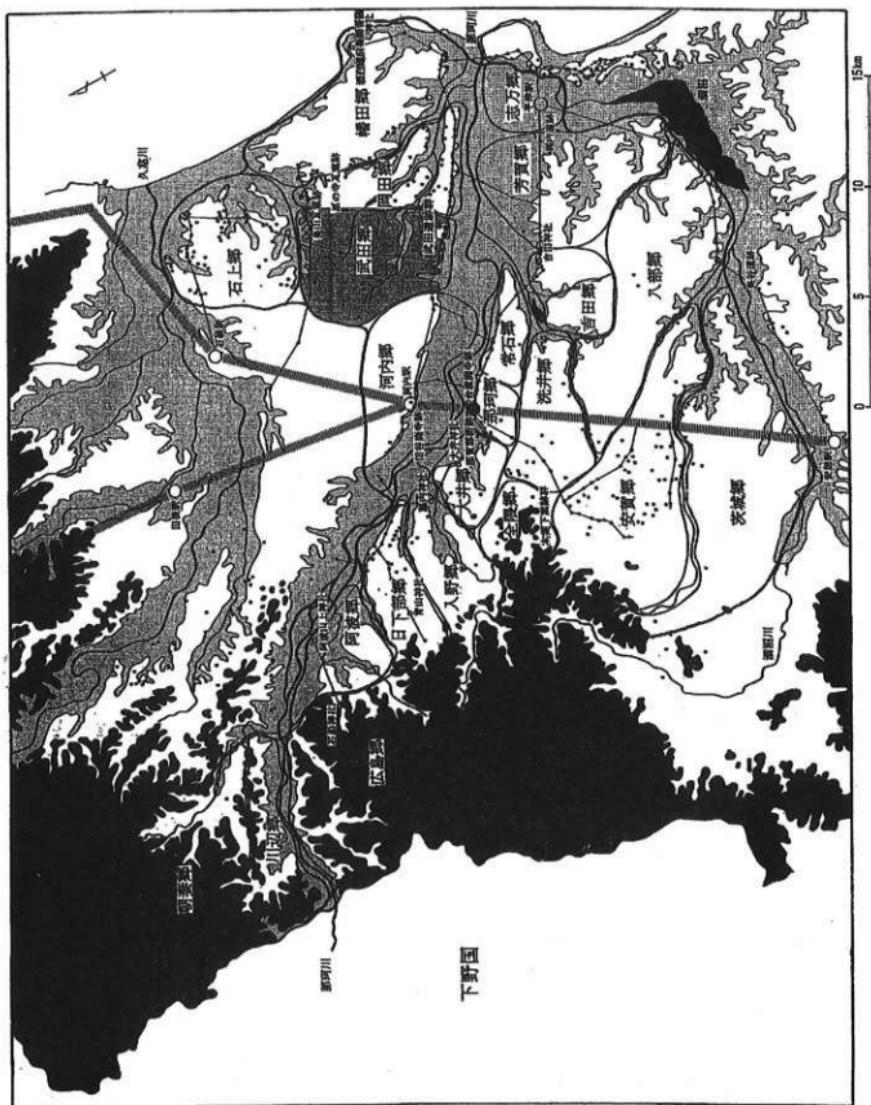
第6図 観音堂山地区の伽藍配置と造営順序 (川口 2006 より転載)



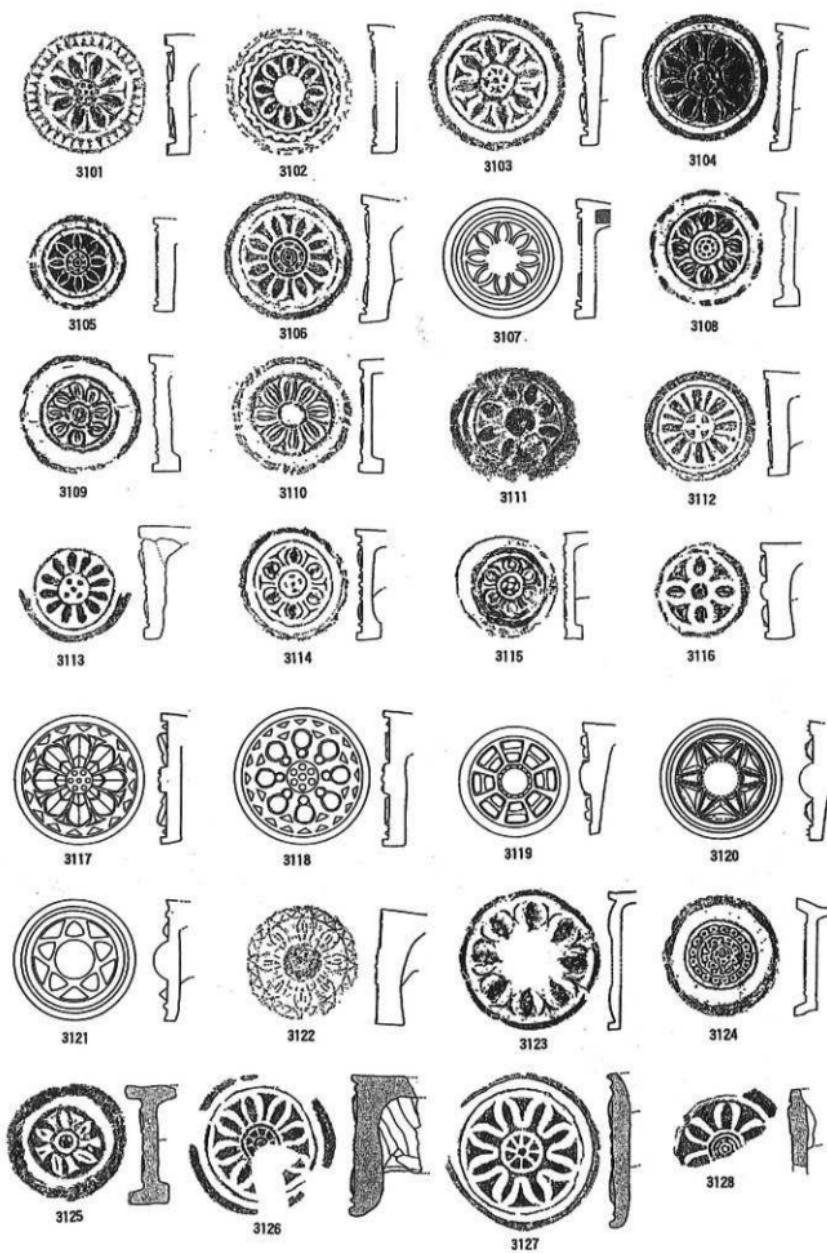
第7図 南方地区の伽藍配置(川口 2005より転載)



第8図 南方地区塔(SB001)実測図(川口・小松崎・新垣編 2005より転載)



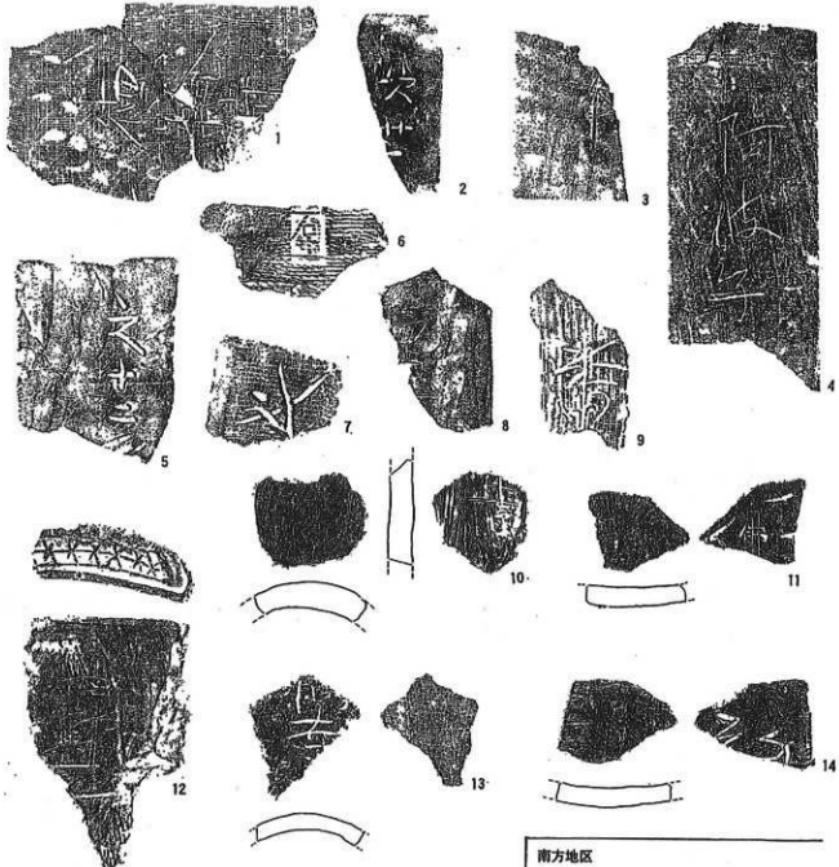
第9図 奈良・平安時代における那賀郡の郷と遺跡の分布(佐々木 2000より転載)



第10図 台波里廃寺跡出土軒先瓦(1)(川口 2005より転載)

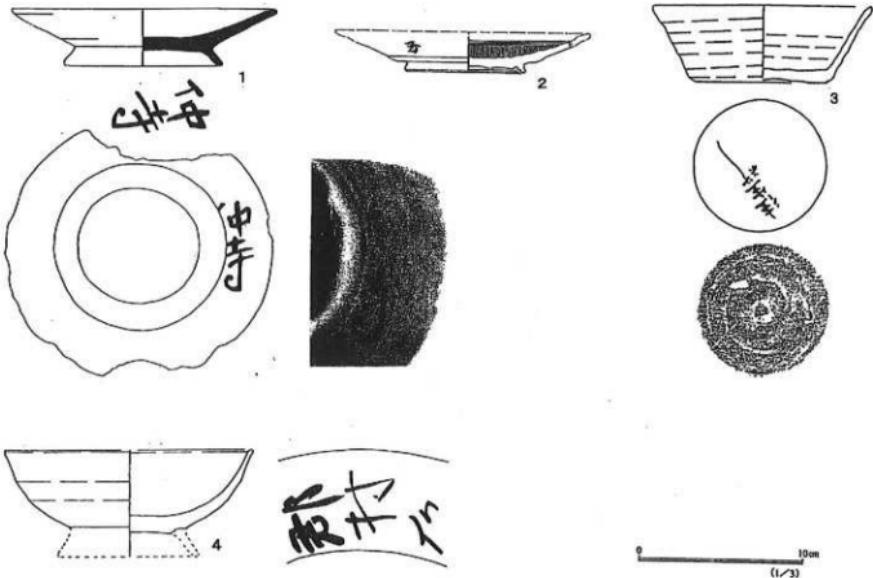


第 11 図 台渡里廐寺跡出土軒先瓦(2) (川口 2005 より転載)

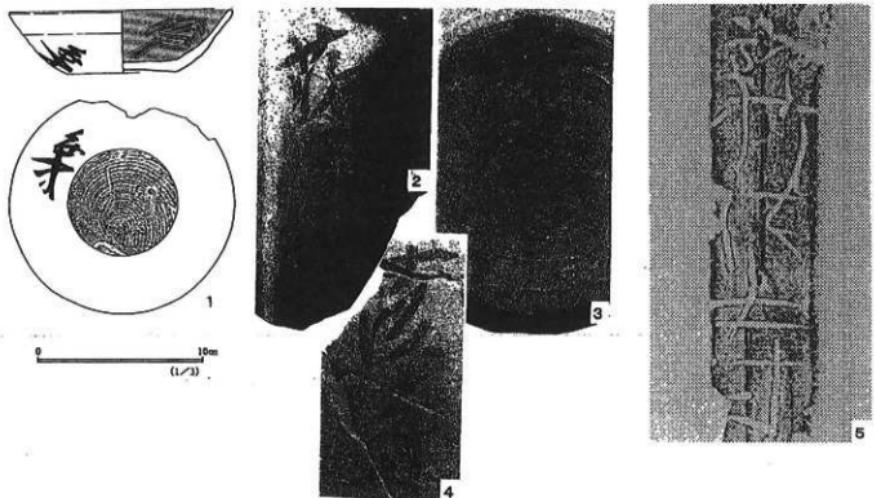


南方地区

第 12 図 觀音堂山地区・南方地区的文字瓦 (川口 2004 より転載)



第13図 台渡里廃寺跡出土の墨書土器(川口 2005より転載)



第14図 常陸国内出土の郡名寺院を示す墨書土器(川口 2005より転載)

第1表 台渡里廃寺跡と周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	参考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石鎚・土偶・弥生土器（後）・土師器（古）・須恵器（古）	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・石斧・石鎚・土偶・弥生土器（後）・土師器（古）・須恵器（古）	
24	アヲケ遺跡	集落跡	尖頭器（先）・縄文土器（早～後）・石斧・石鎚・土偶・土師器（古～中・平）・須恵器（後・平）	
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・弥生土器（後）・土師器（古・高・平）	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・土師器（高・平）・須恵器（高・平）	
27	阿川遺跡	集落跡	縄文土器（中～後）・土師器（古）・土師器（高・平）	
28	梵天遺跡	集落跡	縄文土器（早～後）・弥生土器（後）・土師器（古前・後）	
29	鹿間山遺跡	集落跡	縄文土器（後）・弥生土器（後）・土師器（古前・後）	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器（中～後）・石斧・土偶・弥生土器（後）・土師器（古）・須恵器（古）	
46	草木坂遺跡	集落跡	後鏡（先）・周文土器（前～後）・土師片陶・石製品・陶製品・弥生土器（後）・土師器（古・中・平）・須恵器（高・平）	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器（後）・土師器（古）・須恵器	
48	小道内遺跡	集落跡	縄文土器（中～後）・弥生土器（後）・土師器（古）・土師器（高・平）	
63	坪井里遺跡	集落跡	土師器（古・高・平）・須恵器（古・高・平）	
64	畠通跡	集落跡	弥生土器（後）・土師器（古前・後）・須恵器（高・平）・須恵器（良美・平安）・絞繩器・磨石・石製品・鐵製品（鍔・錐・刀子・矛）・瓦・内耳土器（中）・土師質土器（中）・常滑焼（中）・埴輪（中）・石臼・瓦質土器（後）・埴輪（後）	H 5年、H 6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	古墳（前）・土師器（高・平）	
78	虎岩山古墳群	古墳群	円錐墳・形象埴輪・鐵刀（古）	前方後円墳 1(2)、円墳 1(3)
80	西原古墳群	古墳群	土師器（古）・須恵器・勾玉・碧玉・丸玉・簾玉・斯環・鐵鏡（古）	前方後円墳 1、円墳 8(11)
94	僧院山古墳群	古墳群		円墳 1(2)
95	僧院山穴群	縫穴群	土師器（古）・須恵器（古）・水晶製切子玉・ガラス製小玉（古）	横穴墓 8(4) ?
96	富士山古墳群	古墳群	土師器（古）・円錐埴輪・人物埴輪（古）	前方後円墳 1(?)、円墳 8
97	小原内古墳群	古墳群	円錐埴輪・形象埴輪・鐵刀（古）	前方後円墳 1(?)、円墳 2(4)
98	台渡里廃寺跡・寺院跡・官衙跡	寺院跡・官衙跡	ナイツ形石器・縄文龜甲形骨頭・削器（先）・縄文土器（後・中）・石斧・石鎚・土偶・土器（後）・土師器（古・中・後）・須恵器（古）・鐵製品（鍔・錐・刀子・矛）・瓦・内耳土器（後）・軽量土器（後）・鐵鏡（中）・鐵鏡（後）・骨製品（中）・骨製品（後）・骨製品（後）・鐵鏡・口環・カクタ（中）	S14-S15E、S16-S17E、H 5年、H 6年、H 8～H10、H12～H15年調査
99	田谷高寺跡	寺院跡・官衙跡	土師器（古・平）・須恵器（古・平）・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文瓦（古・平）	
100	長者山城跡	城館跡		土塁と堀が良好な状態で遺存
121	源町里遺跡	城館跡	縄文土器（草・中・後）・土師器（古・高・平）・須恵器（古・平）・灰釉陶器（古・中）	H 15年、H 16年度調査
125	暁宮遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）・弥生土器（後）・土師器（古前・後）	
126	御宮古墳群	古墳群		前方後円墳 8(1)、円墳 9(2)、深感
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器（中・後）・土師器（高・平）・須恵器（古・平）・石製品・鐵製品・軽量土器（後）・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文瓦（古・平）	
226	白石遺跡	城跡/集落跡	角錐状石器（先）・削器（先）・尖頭器（草前）・有舌尖頭器（草前）・石鏡（先前）・圓文土器（中）・弥生土器（後）・土師器（古・高・平）・須恵器（古・高・平）・内耳土器（中）・埴輪（中）・組合（中）	H 2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳 5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器（古・平）・須恵器（古・平）	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器（古前）	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳 1(1)、深感
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器（後）・土師器（古）・陶器	円墳 1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器（後）・土師器（古・高・平）・須恵器（古・平）	
232	中河内跡	城跡		
276	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器（後）・土師器（古・高・平）・須恵器（古・高・平）・削器（先）・鐵製刀子（中）・鐵製刀子（古）・鐵製刀子（古）・鐵石（古）・内耳土器（中）・軒瓦（古）・出筋（古）・鐵製器（古）・鐵製器（古）	H 6年、H 8年、H 14～H 16年度調査

(井上・要沼・仁平・根本 1986) に加筆

第2表 観音堂山地区の礎石建物跡属性(川口 2006より転載)

範囲確認 調査の名称	高井報告 の名称	東西長 (m)	南北長 (m)	版築土厚 (m)	版築土中の瓦	柱間 (桁行・棟行)
講堂 (SB001)	第1号跡	15.2	25.5	1.0	× <del>○</del> ○ ○	7間4間 (四面庇)
経蔵／鐘楼 (SB006)	第2号跡	7.9	7.8	0.55	○ (格子叩き、長縄叩き)	—
金堂 (SB002)	第3号跡	14.0	10.3	0.7	×	—
塔 (SB003)	第4号跡	11.0	10.0	0.7	○ (斜格子叩き、3126型式軒丸瓦)	—
中門 (SB004)	第5号跡	6.8	7.8	0.1～0.2	×	—
性格不明建物 (SB010)	第7号跡	6.6以上 10.0以内	13.4	0.4～0.5	○ (格子叩き、長縄叩き)	—

※高井報告の「第6号跡」と「第8号跡」については版築状の整地層として理解しており、礎石建物とは区別している。

第3表 南方地区の礎石建物跡属性(川口 2006より転載)

範囲確認 調査の名称	高井報告 の名称	東西長 (m)	南北長 (m)	版築土厚 (m)	版築土中の遺物	柱間 (桁行・棟行)
塔 (SB001)	南方土壙	10.0	10.0	1.9	○ (格子叩き平瓦、内面黒色処理土師器 片、須恵器焼片、端部折り返しの須恵 器坏蓋片)	3間3間
金堂 (SB002)	—	9.0以上 12.0以内	7.2	0.3	×	—



写真1 台波里廃寺跡国指定範囲

## 仲国から那賀郡へ

川崎 純徳

### I. まえがき

水戸市愛宕町に所在する愛宕山古墳は仲国造祖建借間命の墳墓と伝えられている。規模は全長 136m を測り、茨城県第3位の大型前方後円墳である。築造時期は5世紀前葉とされている。

一般的に東国に国造制が導入されたのは6世紀後半とされており、愛宕山古墳は国造制の導入よりも1世紀以上も古い事になり、これが仲国造の墳墓でないことは明らかである。

国造とは何なのか。国造とは大和政権が全國支配のために設置した地方官であり、「大王権力に服従した地方首長を国造に任命することによって漸次に地方を大和政権に組み込んでいった」とされている。つまり地方豪族が国造に任命されたとするのが通説なのである。

しかし、実情は国造制は広範囲にわたって一斉に施行された地方支配制度であるし、西暦600年前後の古墳文化の在り方から、とうてい在地首長がそのまま国造となったとは思えない。在地首長が国造となって、從来の支配権をそのまま温存・継承したならば古墳文化は何ら変革することなく展開して行くはずである。

しかし、この時期はきわめて大きな画期を迎えることになる。例えば方墳、横穴墓、装飾古墳などが伝播して来る。また、前方後円墳は終焉を迎え、埴輪も完全に消滅する。詳細に見ていくば副葬品も変化し、横穴式石室の構造それ自体にも変化がみられる。単純な文化伝播ではなく、大きなうねりが到来してきたことを思わせる。これらの変化を歴史動態として捉え、どう位置づけるかが大きな課題であることは言うまでもない。仲国はそうした中に出現して來るのである。

### II. 仲国の成立

『日本書紀』崇峻紀に興味ある記事がある。崇峻天皇は即位の2年後、589年に東国の大統領のためには3人の將軍を派遣している。「遣近江臣滿於東山道使親蝦夷國境 遣宍戸臣雁於東海道親東方浜海諸國 遣阿部臣於北陸道使親越等國境」とある。蝦夷等の國境を親さしむというのは単なるポーズであつて、実態は大和政権の地方制度づくりに主眼があつたのではないかろうか。その最大の目的は篠川 賢氏が指摘しているように「国造制が本来、朝鮮半島派遣軍の確保を目的に施行された制度」(篠川 1985)であったものと思われる。

このことは從来、九州各地の豪族を主体として編成されて来た半島派遣軍の行き詰まりを物語るものであり、東国に新たな兵員供給地を確保することを目的としたものであった。

宍戸雁のもとに、のちの常陸國の範囲の中に仲、久自、高、茨城、筑波、新治の陸國が成立し、各々に国造が配置されることになる。その時期は少なくとも589年以前にさかのぼることはないのである。

仲国は現在の常陸大宮市付近から鹿島・行方の一部を含む広大なものであった。仲国成立前に、これらの地域全体を支配する在地豪族は存在しない。この時期の豪族の支配領域はそれほど広かつたとは思えず、各地に豪族が割拠していたものと思われる。

6世紀後半那珂川流域にも小規模な群集墳が形成されるが、こうした群集墳はほぼ1km の間隔で形成されている。多くは小型前方後円墳を盟主墳として10数基の円墳群からなるものが多い。こうした中にあって50m 級の前方後円墳は注目される。これらは当該期の有力古墳とみられるからである。2, 3の例を挙げる。

水戸市西原古墳群は、前方後円墳1、円墳8基よりなる。前方後円墳は全長50m、後円部径30m、高さ3.5m、前方部幅15m、凝灰岩製横穴式石室を有している。

ひたちなか市大平古墳群は前方後円墳2、円墳10数基よりなるが早くから市街地化され湮滅している。前方後円墳はいずれも50m級であり、黄金塚古墳は埴輪を持つ6世紀後半のもので横穴式石室を有する。大平1号墳は前方部に横穴式石室を有する特殊なものであり西暦600年初頭の築造であると推定される。

城里町徳化古墳群も注目される。本墳は全長35m、後円部径27m、高さ3.5m、前方部幅20m、高さ1.5mと伝えられているが、前方部はほとんど消失している。石室は全長6m、幅1.8mを計測するが出土品は知られていない。円墳はほとんど湮滅している。

しかし、前方後円墳と伝えられるものは、検討の余地がある。方墳の可能性も残される。埴輪は持たず、西暦600年前葉に位置づけられるものと思われる。

この他にも仲国各地に6世紀後半から7世紀初頭にいたる古墳群は各地に築造されている。これらの古墳群の中にみられる前方後円墳は埴輪こそ持たないもの在地古墳の伝統を継承しているものと考えられる。

在地古墳の伝統に属さない古墳がひたちなか市虎塚古墳である。虎塚古墳は前方後円墳であるが埴輪を持たず、主体部の位置も地域の前方後円墳がくびれ部に横穴式石室を持つのに対して、ほぼ南北に主軸を有すること、一枚石の巨石を用いていること、壁画図文を有することなどがあげられる。壁画図文は型式的には西北九州の直弧文の系統に属し、その最終末に位置づけられる。造営年代は7世紀第1四半期とされるが、この年代からみて国造墳墓の第1候補にあげられよう。同じような理由で筑西市舟王古墳、桜川市花園古墳についても新治国造の墳墓の可能性を検討すべきであると思っている。

虎塚古墳群は方墳と墳形不明の数基よりなる。墳形不明としたものは円墳あるいは多角形墳である。前方後円墳→方墳→円形または多角形墳の変遷を予告しておきたいが、これは大和政権と無関係ではないだろうと思うからである。方墳の急速な普及は蘇我氏の勢力の地方への浸透とは無関係ではなかろう。

しかし、蘇我氏の滅亡は同時に方墳を築造してきた地方有力者の地位にも何らかの影響があったと考えるのが自然であろう。

虎塚古墳群の方墳後の円形ないしは多角形墳の存在、吉田古墳もまた、方墳ではなく円形もしくは多角形墳と考えるならば、7世紀中葉のこの地域の古墳の在り方を具体的に示しているのかもしれない。

### III. 仲国造

仲国造の初祖は建借間命であろう。いわゆる多氏一族である。このことは在地首長が大和政権に服従して、国造に任命されたのではない。大和政権によって国造が派遣され、その国造の管掌する地域の一つが仲国と呼ばれることになったのである。『常陸國風土記』が伝える建借間の逸話などは、彼が西北九州杵島地方の出であることを示していないだろうか。

国造の任務は「ぐに」という領域を束ねる地方行政官というよりも、在地首長層の上に立って半島派遣軍の微発を主な任務にしていたのではなかろうか。

国造は軍を率いることが任務としてあり、半島まで赴くこともあったのである。明らかに大和政権の地方行政官としての任務とは異なるものであった。その地位は世襲的であったかどうかは不明である。しかし、少くとも地域に土着するまでは多少の年月を要したことであろう。

水戸周辺に多氏伝承は多い。水戸市飯富、大井神社もその一つである、大井神社付近にある馬場尻遺跡は、地方豪族としての多氏の本貫地としての面目を保つものであろう。綠釉陶器片、硯などの多出は、この遺跡が一般的な集落とは違うことを示すものであろう。

国造として文献に登場するのは壬生直夫子である。『常陸國風土記』の行方郡の立評にからんで仲国の一部と茨城国的一部をさいて行方評が作られたことが記されている。この年代は孝徳朝、白雉4年(653)ごろと推定され、同じころ信太評、白壁評、河内評などができる、少し前に立てられた香島評をあわせて11評が成立したことになる。

こうした建評は明らかに国造の地位の没落を示す。国造自体が申請して新たな評の誕生を強調しているが、大化改新後の新たな政治的現実を反映したものであることは疑いの余地はない。大化改新後、国一郡一里の制度が生まれ、国に国司、郡に郡司、里に里長が置かれることになる。

一般的には国造は郡司として勢力を保ったとされている。しかし、『常陸國風土記』の建評記事からは、国造が存在していることが示されている。その後の国造の運命は不明である。

#### IV. 那賀郡の誕生

大宝2年(702)、評は郡に改められ、那賀郡が誕生した。靈亀元年(715)には郷里制が施行され、里は郷に、村は里に改められた。

那賀郡は22郷となる。22郷名は『和名抄』に見える。すなわち、幡田、岡田、武田、志万、河内、大井、日下部、川辺、石上、吉田、八部、全限、茨城、阿波、那珂、広島、芳賀、朝妻、常石、隠井、安賀、入野の22郷である。

『和名抄』は9世紀ごろの実情を伝えたものであり、それ以前の郷名が全く変更が無かったとは言えない。事実、台渡里廃寺跡からも郷名と思われるものが確認されている。859年に那賀は那珂と改められた。その後の郡域の変遷は武士団の勢力と関係が濃い。豊臣秀吉の文禄検地によって那珂川を境として右岸は茨城郡に、那珂川左岸から久慈川右岸までが那珂郡と呼ばれるようになり今日に至るのである。

那賀郡の郡領としては『続日本紀』養老7年(723)の条に大領宇治部直荒山の名が知られている。これによって評造(大領)氏族の交替があったことが推測できる。大領の交替にもかかわらず、台渡里廃寺跡の修造は継承されていく。このことは単に那賀郡としての問題だけでなく、中央と国、国と郡、郡と里の政治構造の在り方を示すものであろう。

その中で那賀郡の特異性をあげるとするならば国造家一族が大領の交替に何らかの役割をはたしていたのではないかと言うことである。郡司の交替は、中央政治権力の動向に無関係とはいえない。郡司と里長の関係はどうであったのか。里(郷)は班田農民の居住地であるが、その中に有力者の住居跡の存在が示唆されるように、古墳時代以来の支配構造は温存されていた。里(郷)長層は郡司と結ぶことによって、その権力を維持してきた。あえて言えば、権力の保証は里の外側にあったのである。郡司の交替があれば、新しく就任した郡司と結びつきを強化しない限り、里長としての、あるいは伝来の権力の維持は困難であったと推測される。

台渡里廃寺跡の修造が、郡司交替と無関係に続けられるのは国司と里(郷)長の関係に基づく、自発的な資材・労役調達方式が確立していたからではなかろうか。

瓦貢納が強制されたり、賦課方式によって調達されることはなかったのではないかと考えたい。いずれにせよ今後の課題であることは言うまでもない。

(茨城県埋蔵文化財指導員)

#### 引用文献

篠川 賢 1985 『国造制の成立と展開』吉川弘文館

那珂郡廿二郷図



(「新編常陸国誌」より)

上古常流六国図



(「新編常陸国誌」より)

大化改新始原古跡図



(「新編常陸国誌」より)

## 常陸の古代瓦

黒澤 彰哉

平成6年に茨城県立歴史館がまとめた県内古代瓦の確認調査では、県内28市町村(旧)から116遺跡の古代瓦出土地が確認できた。このうち、現段階で寺院跡と考えられるものは25遺跡、瓦窯跡は15遺跡存在する。これらの遺跡は、各郡の官衙遺跡や寺院跡、または瓦窯跡であるが、台渡里廃寺跡のように、寺院跡かどうか意見が分かれていたものが、その後の調査で明らかになったものもある。

本論では、前の県内古代瓦の調査に新たに明らかにされた内容を加え、各郡ごとの古代瓦の様相を概観してみたい。なお、各郡の( )内の数字は「和名抄」による郷の数である。

### ○ 多珂郡(8郷)

北茨城市大津廃寺跡では、昭和56年に行われた調査により、長辺 17.5m、短辺 16.0m の版築基壇が確認されている。軒丸瓦は素縁複弁8葉蓮花文(1101)と、交叉文縁複弁6葉蓮花文(1102)の2種類が確認されているが、主体となるのは 1102 で、福島県南部から県北に分布する特徴をもつ。軒平瓦は段頭の三重弧文(1201)で、凸面を繩叩きとする。無段丸瓦、桶巻き作り平瓦が確認されているが種類が少なく、創建後修復はなかったと考えられている。1101 は群馬県山王廃寺の素縁複弁7葉蓮花文軒丸瓦と類似する。時期は山王廃寺(故光寺)の年代から、7世紀第4四半期と考えられる。

このほか、同市中郷町の馬田遺跡から鉢齒文縁連珠文軒丸瓦(1150)と、唐草文軒平瓦(1260)が出土している。遺跡の性格は不明であるが、軒先瓦をみると両者の組み合わせしかなく、修復などは行われなかつたようである。軒平瓦の唐草文の特徴から平安時代のものと思われる。

### ○ 久慈郡(21郷)

稲谷廃寺跡(長者屋敷遺跡)は、「久寺」の墨書き土器が出土しており、久慈郡の郡名寺院であることが明らかである。さらに、近年では鬼面文鬼瓦や幾何学文様センなど多くの資料が増加している。県教育財團によって確認された構をもとに考えると、南北3町、東西2町の寺院地が想定でき、瓦の分布はほぼこの中におさまる。長者屋敷遺跡の名称のとおり、近くに炭化米が出土する場所があることから、正倉が近接して存在する可能性が考えられる。

現在のところ確認されているのは、素縁単弁8葉蓮花文(2101・2104)、素縁複弁6葉蓮花文(2102)、素縁単弁11葉蓮花文(2103)、素縁単弁8葉(大小)蓮花文(2105)、素縁単弁8葉蓮花文(2106)軒丸瓦と、段頭の三重弧文(2201)軒平瓦、無段頭の素文(2230)軒平瓦で、このほかに鬼面文鬼瓦や幾何学文様センがある。

軒丸瓦では、楔形間弁に区画された中に花弁を置く 2103 と 2104 が同じ文様系列にあり、大小の花弁4葉を交互に並べた 2105 と 2101 が同系列に属する。小花弁の頂部につく唐草文の有無から判断すると、2105 から 2101 の変化が考えられる。このほか、2102 は大津廃寺 1102 の流れを受けたもので、2106 は瓦当部の特徴や間弁の形態から台渡里廃寺 3112 軒丸瓦に類似している。鬼面文鬼瓦は外縁から面部が突出しない平板な形態で、円頭方形を呈し、鬼板の裏面上部周縁には接合痕をもつ。幾何学文様センは、長方形の四辺の側縁部に唐草文・菱形文・三角文などの異なる文様パターンが見られるもので、文様が5個あることから少なくとも2つの文様センが存在するものと思われる。

このほか、平瓦に興味深い技法が存在する。これは凹面に繩目痕をもつもので、桶巻き作りの後に分割された平瓦を繩目の敷物を敷いた(もしくは繩を巻き付けた)成形台にのせ、再度凸面叩きを行うというものである。その結果、凸面には桶巻き作りの際の繩叩きと、成形台の叩きの斜格子叩きが重なって認められることがある。このような凹面繩目痕の平瓦は類例が無く、伝由良川河底出土の高句麗系軒丸瓦裏面に僅かに見られたほかは、北朝鮮の土城跡など高句麗の遺跡に認められるのみである。

本廃寺の瓦には高句麗の影響が認められるが、その背景には『日本書紀』の持統天皇元年(687)三月に高麗の56人が常陸国に配されたことに関連があるものと思われる。

瓦窯跡では常陸大宮市鷹巣瓦窯跡で2基の窯跡が発見されている。

### ○ 那賀郡(22郷)

那賀郡内では、台渡里廃寺跡(長者山地区・觀音堂山地区・南方地区)、田谷廃寺跡、木葉下窯跡、栗師平遺跡、山田窯跡、原の寺窯跡、下入野遺跡、長福寺遺跡、中台遺跡、有賀遺跡など、多数の瓦出土地が存在する。台渡里廃寺跡では、今回の調査により觀音堂山地区が郡名寺院跡、長者山地区が正倉跡であることが明らかとなった。軒先瓦は多種にわたって確認されており、その分析は緒についたばかりである。ここでは、今後の研究をまつことにして、台渡里廃寺周辺の様相を見ることにする。

田谷廃寺は、伊東重敏氏によって瓦出土地点の測量が行われ、文字瓦が紹介されている。文字瓦は両面糸切り痕の平瓦や有段丸瓦に刻まれており、文字には「岡田」、「千」、「八」、「田加」、「丈」、「人」、「大」などがあり、大部分が金釘流の書体となっている。田谷廃寺の瓦に最も近いのは原の寺瓦窯跡出土のもので、原の寺窯跡の場所が古代の岡田郷に属する事を考えると、田谷廃寺の瓦は原の寺瓦窯跡から供給されたものであることが考えられる。

木葉下窯跡は、須恵器を製作した大遺跡群で、須恵窯の焼台に瓦が用いられていることから、窯跡群内に瓦窯跡が含まれる可能性が考えられている。栗師平遺跡はこの木葉下窯跡群の北西に位置している遺跡で、高取山の山麓にあたる場所にある。遺跡内には土壇状の高まりや礎石があるとされており、長縄叩き平瓦などが出土している。

有賀遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡で、遺跡内から小金銅仏と格子叩き平瓦、それに須恵器杯が出土している。調査されていないので出土地の性格が不明であるが、格子叩き平瓦と金銅仏が出土していることから、仏堂的な施設が存在した可能性が考えられる。

中台遺跡も平安時代の集落遺跡で、国分寺と同範の軒丸瓦(7109)が出土している。

## ○ 香島郡(18郷)

正倉跡である神野向遺跡から素縁7葉蓮花文(4103)と格子叩き平瓦が出土している。4103は中房区を大きくとり花弁が平坦となったもので、県内では類例のない瓦当文様である。瓦は8世紀前半の建物の柱抜き取り痕から出土している。

神宮寺跡は鹿嶋市鉢形にあった寺院跡で、天平勝宝元年(749)に僧満願により鹿島神宮の神宮寺として創建されたものである。神宮寺跡からは、センを敷き詰めた基壇が発見されているが、屋瓦については確認されていない。

## ○ 行方郡(17郷)

行方市井上にある井上神社の東方に井上廃寺跡がある。近くには井上長者屋敷遺跡もあり、官衙である可能性が指摘されている。井上廃寺跡は道路拡張工事に際して行われた調査により北側溝が確認され、寺院跡であることはほぼ間違いないようである。出土している軒丸瓦は、素縁単弁6葉蓮花文(4101・4102)、素縁単弁18葉蓮花文(4105)である。4101と4102は花弁の間に細い間弁を入れたもので、4102は間弁や花弁縁が太くなり後出の要素をもつ。4105は国分寺7105と同範で、行方郡内には手質遺跡からも同じものが出土している。なお、4101は県内でも数少ない1本作り技法によるもので、瓦当裏面に布目痕をもつ。

軒平瓦は重弧文(4201)と素文(4230)がある。重弧文は平瓦凸面に格子叩きをもつが、素文も同じような格子叩きもち、創建期に用いられたことが明らかである。この格子叩きは平瓦の主体となるもので、格子の粗密により数種の叩き具の違いはあるが桶巻き作りによる。ただし、素文の軒部は平瓦を折り返して段頭にしめており、他に例のないものである。平瓦には長縄叩きのものが見られるが、これは国分寺7105の導入に際して用いられたものである。

手質遺跡は行方市手質地区の台地上にある遺跡で、遺跡の性格は不明である。ここからは軒丸瓦(4105)と軒平瓦(4280)が出土しているが、これは全て国分寺7105軒丸瓦、7260III軒平瓦と同範である。同様に平瓦も一枚作りによる長縄叩きで、国分寺と同じものである。

鉢田市塔ヶ崎遺跡は台地斜面にある遺跡で、立地から瓦窯跡と推定されている遺跡である。ここからは、香島郡神野向遺跡の4103と同文の4104が出土しているほか、井上廃寺の平瓦と同じものが出土している。位置関係から井上廃寺に関連した瓦窯跡と考えられる。神野向遺跡の軒丸瓦がこの遺跡から出土しているのは、4103が4101・4102の系譜によるものからなのであろう。つまり、行方郡・香島郡に共通して分布することが推測される。

## ○ 茨城郡(18郷)

郡内で瓦が出土するのは、茨城廃寺跡、下佐谷廃寺跡、常陸国分寺跡、同尼寺跡、国衙跡、西寺廃寺跡、山王廃寺跡、上山廃寺跡、高倉廃寺跡、寺畠遺跡、鹿の子C遺跡、一丁田瓦窯跡、閑戸瓦窯跡、松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡などである。

このうち国分寺以前のものは、寺院跡では茨城庵寺と下佐谷庵寺、瓦窯跡では一丁田瓦窯跡と関戸瓦窯跡である。茨城庵寺については調査により金堂・塔・講堂跡が確認され、法隆寺式伽藍配置をとることが明らかとなっている。軒丸瓦は素縁単弁8葉蓮花文(7101)とその小型化した7102、結城庵寺系の鋸齒文縁単弁 16 葉蓮花文(7103)、国分寺の素縁複弁8葉蓮花文(7104a)、素縁単弁 18 葉蓮花文(7105)、同 16 葉蓮花文(7106)があり、軒平瓦では重弧文(7201)、素文(7230)、均整唐草文(7260 I)がある。このうち、国分寺系軒瓦の登場は、茨城郡内にあった造瓦組織が完全に国分寺造瓦所に組み込まれたことを物語っており、前時代の瓦当文様や技法は全て郡内から姿を消している。これらを製作したのは一丁田・関戸瓦窯跡のある上佐谷瓦窯跡群である。特に一丁田窯跡は須恵器窯と瓦窯が並列して構築されており、須恵器杯の年代から8世紀以前に操業されたと考えられる。この地からは格子叩き平瓦や無段丸瓦とともに 7102 の簡便化したものが出土しており、このことから、7101 は7世紀第4四半期に遡ることが考えられる。なお、関戸瓦窯跡からは、桶巻き作りで短縄叩きの平瓦が出土している。これは、下佐谷庵寺跡の内容と極めて似ており、近距離にあることを考えれば、下佐谷庵寺に供給された瓦窯跡であることが明らかである。同じ内容のものが茨城庵寺跡にも認められるので、関戸瓦窯跡から茨城庵寺跡にも供給されたと思われる。

国分寺系の軒瓦が出土しているのは、常陸國分寺跡、同尼寺跡、国衙跡、西寺庵寺跡、上山庵寺跡、高倉庵寺跡、鹿の子C遺跡、松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡である。このうち、軒丸瓦の最古形式(7104a)が出土しているのは国衙跡と茨城庵寺跡で、国分寺・同尼寺の創建瓦は7104bから開始する。もちろんこれは、7104aの範が摩滅する過程で 7104b となったものであり、国分寺の創建に際し多量に使用されたために 7104b となったものである。その後、使用頻度によって 7104c となり、最終的には 7104gまでの段階を踏むことになる。このことは、7104a がもたらされた時、最初に国分寺に先行して国衙の瓦葺化が進められ、同様に茨城庵寺跡の修復が 7104a によって行われたことを示す。

西寺庵寺跡、上山庵寺跡、高倉庵寺跡は地形から山岳寺院跡と推測されるものである。西寺庵寺跡は岩間町館岸山の山麓にある寺院跡で、山林には礎石の一部が存在する。ここからは国分寺 7109 軒丸瓦と 7264 軒平瓦が出土しており、両者の組合せを示している。この組合せは、国分寺塔跡のガラミ堂からも同じように出土しており、ほぼ間違いはない。上山庵寺跡は石岡市(旧八郷町)の小屋の山中にある遺跡で、山林の中には礎石と思われる石が残っている。ここからは国分寺 7105 軒丸瓦が出土していることから、山岳寺院のひとつと推測される。高倉庵寺も、山林中から 7260 I 軒平瓦と三彩陶器片、須恵器などが発見されている。三彩片の存在などから、国分寺に関連した性格が考えられる。鹿の子 C 遺跡は国衙工房として操業された場所で、製鉄関連遺構や長屋状建物跡、それに官衛的な建物群からなる遺跡である。この地からも 7104b 軒丸瓦や 7105 軒丸瓦、7260 軒平瓦が出土している。これらの瓦は、住居内の構築材として再利用されているものであるが、瓦の年代を決定する貴重な資料を伴うことが多い。これから、7104bは八世紀中頃に、7105 は9世紀第1四半期に考えられる。鹿の子C遺跡から出土した瓦の意味するものは、この時期国分寺で作成が行われていたということである。つまり、鹿の子C遺跡の性格を蝦夷戦争による補給地と限定せず、国内の大事業である国分寺造営、それと弘仁9年(818)の大地震による修復といった面をも考慮すべきであると思われる。

松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡は全て国分寺関連の瓦窯である。このうち、松山瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡の調査が行われている。

## ○ 筑波郡(9郷)

郡内には、中台庵寺跡、平沢官衙跡、下大島遺跡、東城寺、筑波山庵寺跡が存在する。調査で遺跡の性格が明らかになったのは筑波郡正倉である平沢官衙跡であるが、中台庵寺は塔の露盤石の存在から寺院跡であることは確実であり、東城寺・筑波山庵寺跡は地形から山岳寺院と考えられる。

平沢官衙跡の出土瓦は量が少なく、瓦当の全体が分かるものは見られない。軒瓦では、新治庵寺 5104b 軒丸瓦と同形のものが1点(大溝)、新治庵寺 5260 軒平瓦の簡便化したものが整地層から出土している。平沢地区からは、結城庵寺系の鋸齒文縁単弁 16 葉蓮花文(8107)が出土しているが、これが平沢官衙跡からの出土であれば新治庵寺の軒瓦が入る前に、結城系の軒瓦が入っていたことになる。

中台庵寺からは、素縁単弁8葉蓮花文(8102)、鋸齒文縁単弁 16 葉蓮花文(8107・8109)、素縁単弁9葉蓮花文(8111)、素縁単弁8葉蓮花文(8112・8113)などが出土している。この中の8102は茨城庵寺 7101 軒丸瓦と同文で、8102の方がやや面径が小さく、花弁と中房の間に顎を入れる違いがある。この8102は筑波系軒丸瓦として長く郡内に伝えられ、下大島遺跡の素縁単弁7葉蓮花文(8103・8104)、東城寺の素縁単弁8葉蓮花文(8105)となって9世紀前半まで変遷していく。特に、8104 軒丸瓦は河内郡の九重東岡庵寺の修復瓦となって郡をこえた広がりを見せている。軒平瓦は良好な資料が少なく、現時点で多くを語ることはできないが、「中村盛吉拓影集」には国分寺 7260 軒平瓦と、新治庵寺 5260 軒平瓦が紹介されており、平

沢官衙で 5260 軒平瓦の簡便化したものが出土したことを裏付けている。また、中台遺跡からは連珠文軒平瓦(8260)が出土しており、下大島遺跡の 8281・8282 軒平瓦のように、筑波郡内には連珠文が 8103 と対応して広がるようである。

東城寺は平安時代に最仙によって開かれた山岳寺院である。この地からは、保安3年(1122)、天治元年(1124)銘の銅製経筒が出土しており、東城寺経塚として著名である。ここから出土した軒瓦は、先にも述べたように筑波系 8105 軒丸瓦と、国分寺 7260 軒平瓦の最終段階のもので、両者は組み合っているものと思われる。

### ○信太郡(14郷)

郡内では、阿見町追原遺跡、稻敷市下君山廃寺跡、同塔の前廃寺から瓦が確認されているが、3遺跡とも近くに官衙推定地が無い。下君山廃寺跡は、遺跡内に石造露盤があることから寺院跡であることは確実である。塔の前遺跡も基壇状の高まりが現状で確認できることから、寺院跡である可能性が高い。

追原遺跡からは、花弁の膨らみが大きい単弁蓮花文(9103)が出土しているが、小片の為全体の様子は不明である。軒平瓦は三重弧文(9203)が出土している。平瓦は桶巻き作りで短縄叩きのものが確認されている。

下君山廃寺からは、三重弧文軒平瓦(9202)と、国分寺系軒丸瓦(7104 か)、国分寺系軒平瓦(7260 か)が出土している。平瓦では、格子叩き、短縄叩き、長縄叩きが確認できた。長縄叩きのものは国分寺以後のものであり、国分寺系軒丸瓦・軒平瓦と同じに伝えられたものである。全体に瓦当文様の分かれるものが見られず、内容については不明な部分が多いが、石造露盤や三重弧文軒平瓦の存在から8世紀前半以前の創建であることは確実である。

塔の前廃寺からは、鋸齒文縁複弁8葉蓮花文軒丸瓦(9101・9102)が出土している。鋸齒文は突線で中房には1+8の蓮子が認められる。軒平瓦は三重弧文(9201)であるが、瓦当部が薄く段頭にはならず、凸面には平行叩きや山形文叩きが行われている。平瓦には格子叩きと短縄叩きが、丸瓦には有段のものが確認されている。

### ○河内郡(7郷)

調査により河内郡正倉跡、郡庁跡、寺院跡が近接して所在するのが確認されている。瓦が出土しているのは九重東岡廃寺の基壇建物跡周辺で、結城廃寺系の鋸齒文縁単弁 16 葵蓮花文軒丸瓦(8106・8107)、同系列で簡便化した素縁単弁 14 蓼蓮花文軒丸瓦(8108)、筑波系の素縁単弁7連花文軒丸瓦(8104)が出土している。軒平瓦では三重弧文(8201)、四重弧文(8203)、下野薬師寺系の唐草文(8260・8261)、筑波系の連珠文(8283)が出土している。

なお、下野薬師寺系唐草文軒平瓦の凸面叩きには格子叩きと縄叩きの両方が存在しており、平瓦にも両者が認められた。

### ○新治郡(12郷)

郡内の瓦出土地には、新治廃寺跡、新治郡衙跡、上野原瓦窯跡、妙法寺遺跡、本郷瓦窯跡、久地衆長町瓦窯跡、薬師台瓦窯跡、小栗寺山遺跡、横塚古堂遺跡などがある。新治廃寺跡は高井悌三郎氏によって調査された寺院跡で、東西塔を金堂の左右に置く新治廃寺式伽藍の寺院として著名である。出土した軒丸瓦は結城廃寺の鋸齒文縁複弁8葉蓮花文(9102)と同類であるが、鋸齒文の数は異なる。新治廃寺の軒丸瓦には、鋸齒文縁複弁8葉蓮花文(5101・5102・5103・5104)、鋸齒文縁単弁 16 葵蓮花文(5105)、唐草文縁単弁 12 葵蓮花文(5106)、国分寺系 5107 軒丸瓦などがある。このうち、5101 から 5104までは中房区を突起させる 5101 から圓錐区画の 5103 に、次いで花弁を変形させた 5104 と変遷する。この後、複弁8葉が単弁化したのが 5105 で、遅れて唐草文縁 5106 や国分寺系 5107 が登場する。

軒平瓦には、格子文(5250・5251)、素文(5230)、重弧文(5201・5202・5203・5204・5205)、唐草文(5260・5261・5262・5263・5264)がある。格子文、素文、重弧文は全て段頭で、広義の創建瓦に属するものである。唐草文は常陸国分寺の均整唐草文の影響を受けており、中心飾りを除いた左右に展開する唐草が極めて酷似する。この唐草文軒平瓦は栃木県にも広がりを見せており、独特な分布図をもつ。軒瓦の組合せは、平行叩きの存在から 5101 と 5201 が、縄叩きの共通性から 5105 と 5230 が、また薬師台瓦窯における供伴から 5104 と 5260 が組むようである。なお、新治廃寺の文字瓦は長縄叩き平瓦になってから登場する。

横塚古堂遺跡は、小貝川流域の微高地に広がる複合遺跡で、地形から瓦窯跡とは考えられない遺跡である。新治廃寺と同じ平瓦が出土しているほか、遺跡内の薬師堂には平安時代の小金銅仏が祀られている。伽藍をもたない小規模な寺院の存在も考えられる。

## ○真壁郡(7郷)

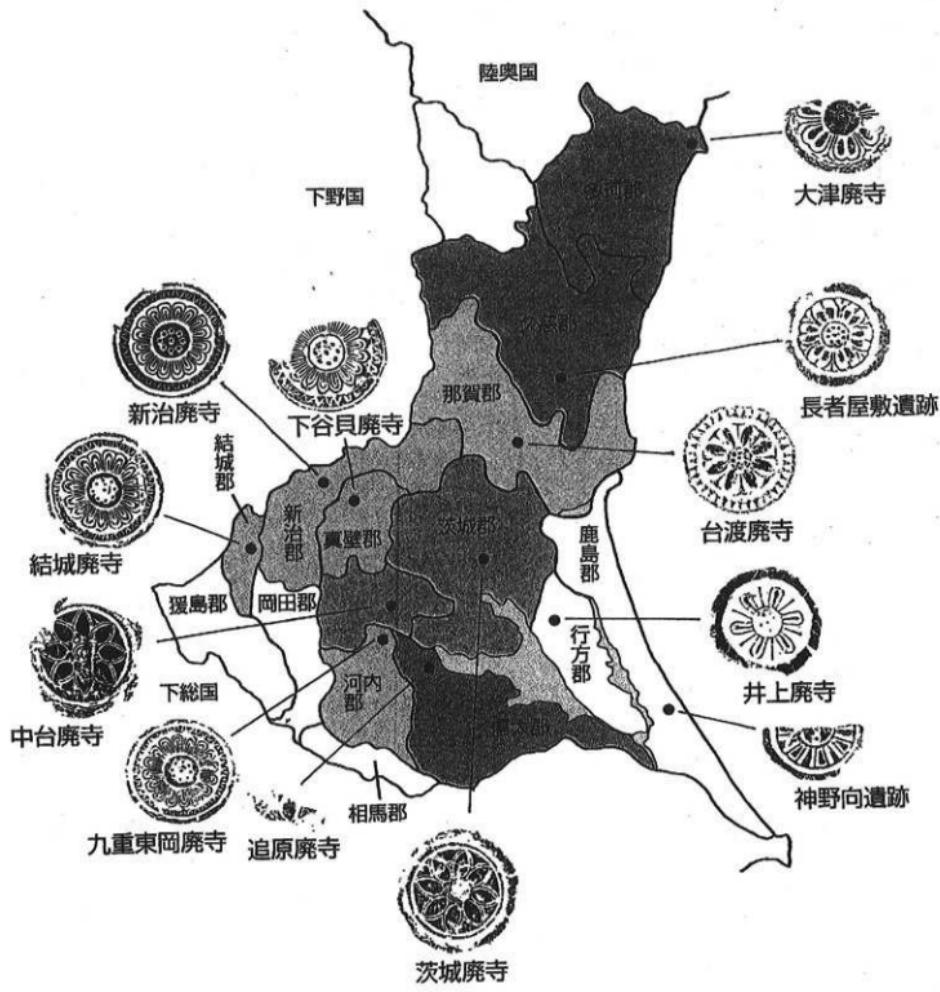
郡内には、新治庵寺と同じ内容の丸瓦と平瓦が出土した御門遺跡、加波山の山麓で桶巻き作り平瓦を出土させた作佐部庵寺、石造露盤をもち金堂・塔・講堂の伽藍をもつ山岳寺院の山尾権現山庵寺、新治庵寺と同じ内容の瓦をもつ下谷貝庵寺、源法寺庵寺などがある。下谷貝庵寺からは、軒丸瓦で素縁単弁 10 葉蓮花纹(6101), 鋸齒文縁複弁 8 葉蓮花纹(6102), 鋸齒文縁単弁 16 葉蓮花纹(6103・6104・6105)が、軒平瓦では均整唐草文(6260)が見られる。基本的に新治庵寺と同じ変化を遂げているが、平行叩きが軒丸瓦や軒平瓦に顕著に認められるという特徴をもつ。

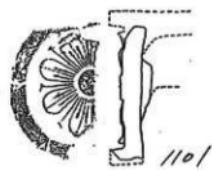
## ○結城郡(5郷)

瓦の出土する遺跡は、郡名寺院である結城庵寺とその瓦窯跡である八幡瓦窯跡である。結城庵寺跡は、調査により法起寺式伽藍配置をとることが明らかにされており、塔跡の掘り込み地業の中から心礎が確認されている。

軒丸瓦には、鋸齒文縁単弁 10 葉蓮花纹(0101), 鋸齒文縁複弁 8 葉蓮花纹(0102), 鋸齒文縁単弁 16 葉蓮花纹(0103・0104)がある。この中の 0102 軒丸瓦は新治庵寺 5101 と酷似しているが、鋸齒文の数の違いなど同范ではない。新治庵寺 5101 と結城庵寺 0101 は並列関係にあると見るべきで、両者は下野薬師寺 101A などの影響を受けて併に成立したものと思われる。両者を前後関係とせずに並列と見るのは、新治庵寺・結城庵寺とも独自に別々の形式を生み出していることから判断した。つまり、結城庵寺では複弁 8 葉の 0102 から単弁 16 葉の 0103 と変化し、更にこの軒丸瓦が九重東岡庵寺に伝わって単弁 16 葉(小)を生み出す。更に、単弁 16 葉(小)は筑波郡中台庵寺、平沢官衙跡、茨城郡茨城庵寺跡、下佐谷庵寺跡、千葉県国分寺周辺遺跡などに分布するようになる。下総国分尼寺から出土したもの(1203)はこの簡便化したものである。

軒平瓦では、三重弧文(0201), 四重弧文(0202・0203・0204), 五重弧文(0205), 下野薬師寺の影響を受けた唐草文(0260)などがある。

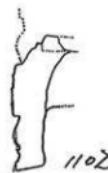




1101



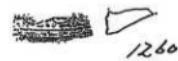
1102



1150



1201



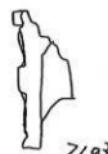
1203



2101



2102



2103



2104



2105



2106



2201



2202



寒威虎



高様A

文様C



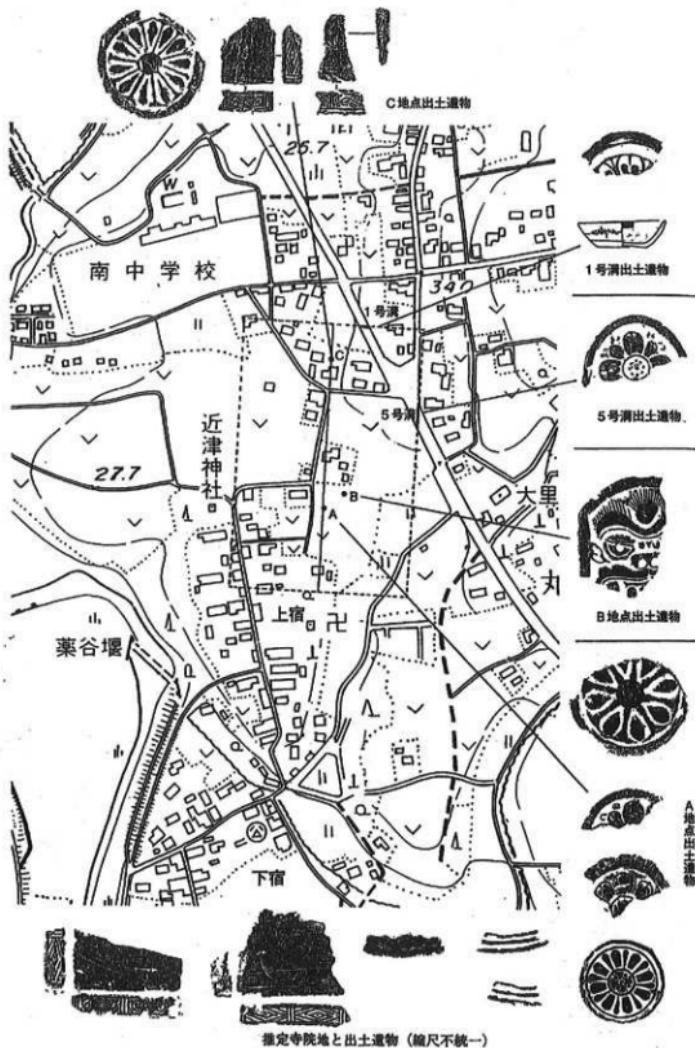
文様D

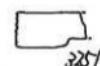
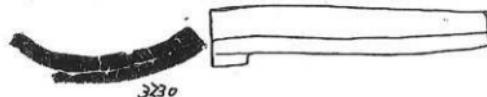
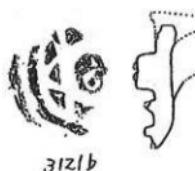
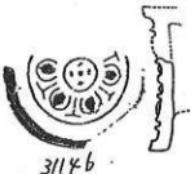
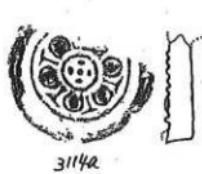
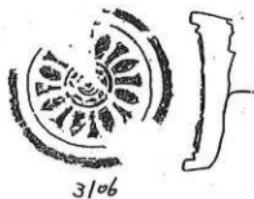


文様B

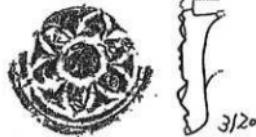
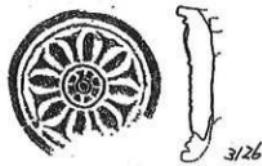


平瓦

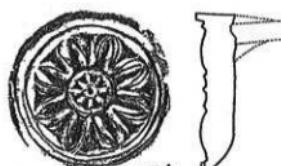




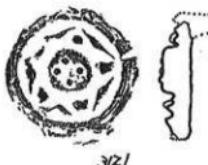
台痕里麻序



床の子瓦風跡

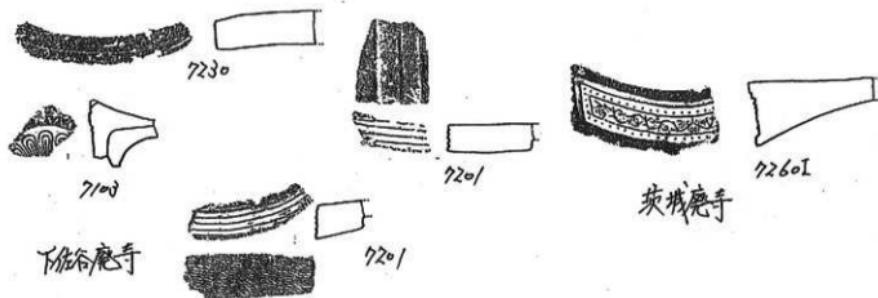
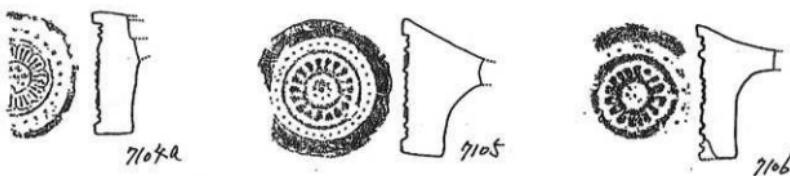
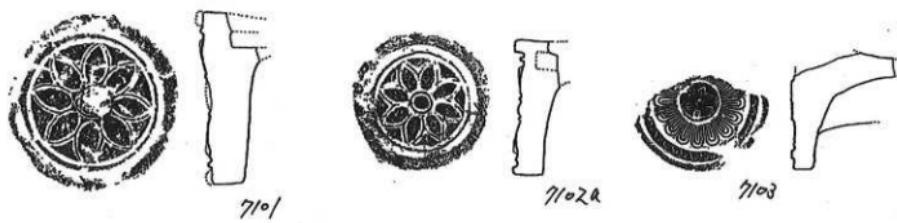
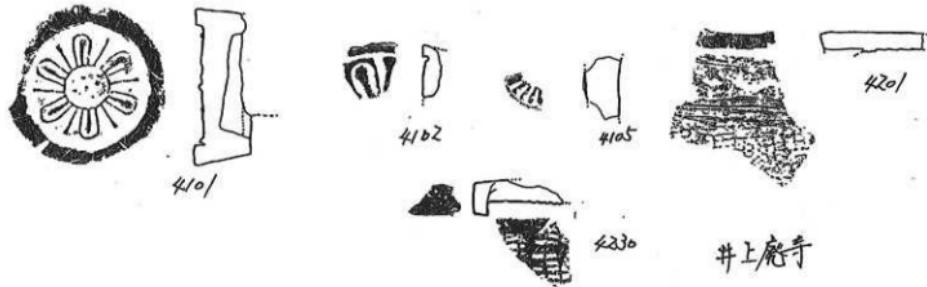


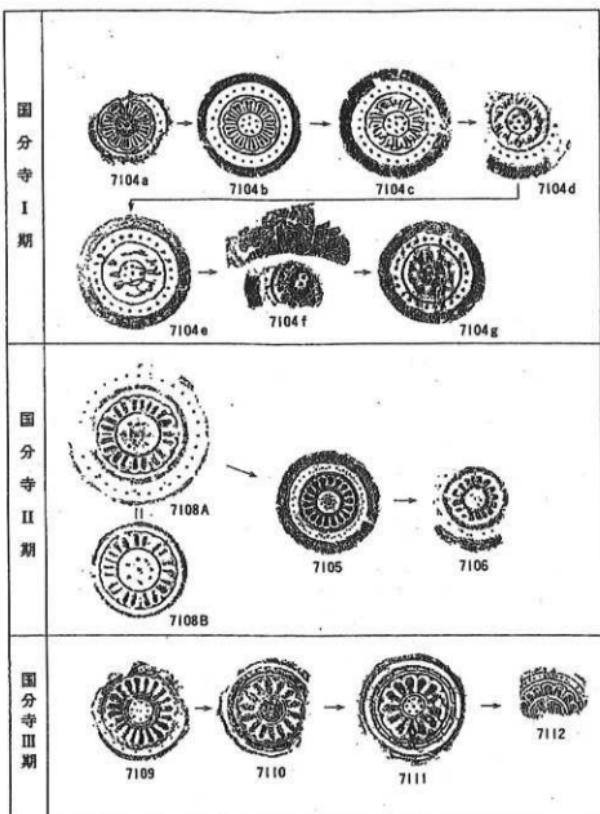
下入野



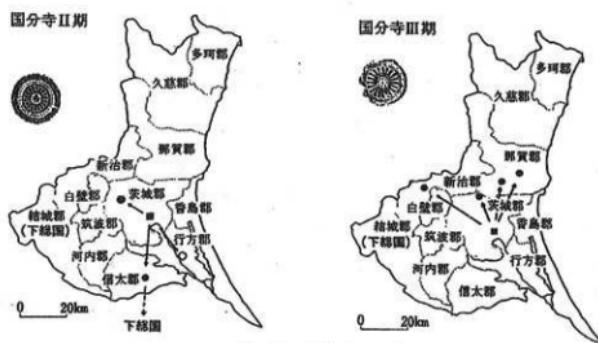
田谷廟



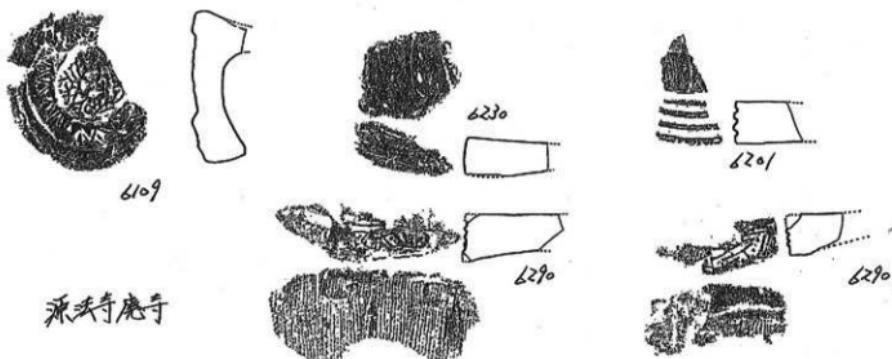
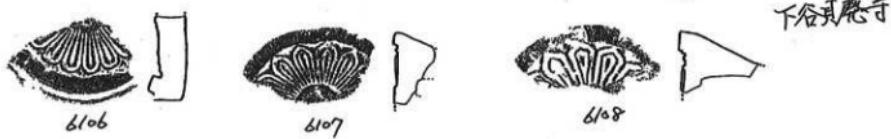
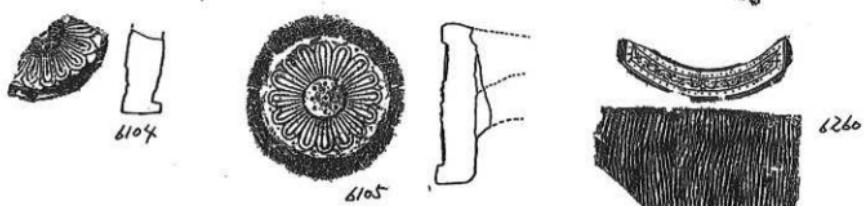
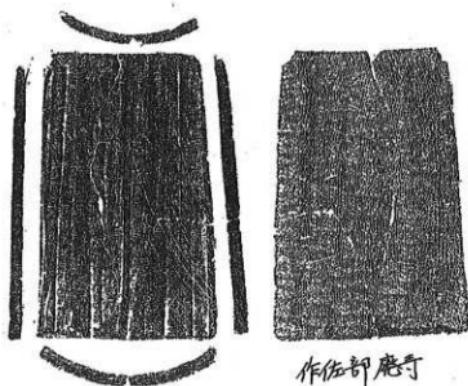




常陸国分寺軒丸瓦変遷図



常陸国分寺軒丸瓦の動向

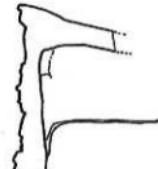




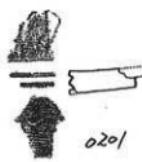
0101



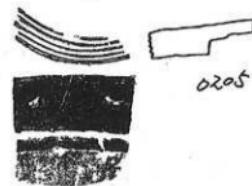
0102



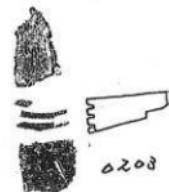
0103



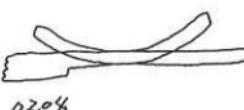
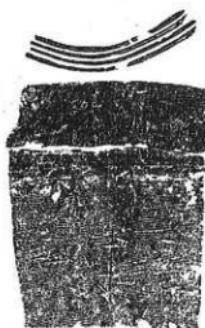
0201



0205



0208



0204

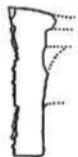


0260

結城廣子



0101



0260



八幡瓦窯跡

## 郡寺の仏像

-茨城・妙法寺伝阿弥陀三尊像・四天王像について-

後藤 道雄

### I. はじめに

台渡里廃寺跡観音堂山地区は、7世紀後半に創建された初期寺院と考えられ、わずかではあるが塑像片が出土している。南方地区は9世紀後半に造営された古代寺院と考えられており、押出仏製作の原型鋳型か光背取り付けの化仏製作のための型かと推定される、二重円相光を負い蓮華座上に坐す如来像の雌型が出土している。現時点では両地区ともに金堂安置の仏像についてはそれを明らかにする資料が乏しい。

ところが最近、新治廃寺に近く9世紀後半に建立されたと伝える桜川市妙法寺の諸像調査の結果(註1)、その尊像構成から新治廃寺焼失後、郡寺としての機能を担った可能性を想定することができることになった。台渡里廃寺跡理解の一助として若干の考察を行いたい。

### II. 妙法寺伝阿弥陀三尊像の概要

#### (1) 伝阿弥陀如来坐像(図1, 2)

##### 【法量】

像高 138.2 センチメートル(以下、単位省略) 髪際高 120.8

##### 【形状】

現状螺髪を表わさない。肉髻珠・白毫相を表わす。耳朶は環状。三道を表わす。覆肩衣、衲衣は左襟縫に初層をかける。

左足外に結跏趺坐する。

##### 【構造】

両肩以下側面部を含む頭体幹部をケヤキの一材から造る。木芯は左脇腹辺に籠める。体部背面、後頭部及び像底から体部を内削りし、蓋板を当てる。両脚部は横木一材製、体幹部と両客部材との間に一材(横木)をはさむ。像底には補材をあてる。左右前脚前半に各一材を矧ぐ。手首先是挿込み矧ぎとする。

##### 【保存状態】

螺髪亡失。肉髻珠、白毫相(各木製、彩色)、各後補。表面のすべて後補。両脚部と体幹部の間に挟んだ横木一材(マチ)後補。腹部と両腰回りに当てる当て木數材が後補。像底の蓋板後補。左手後補。右手第二指付け根から、第三指第二関節から先、第四指半ばから先、第五指付け根から先、各後補。背面背板亡失。台座後補。

#### (2) 伝觀音菩薩立像(図3)

##### 【法量】

像高 150.5 髪際高 136.9

##### 【形状】

垂髪。天冠台(上縁を列弁とするか)を表わす。髪は前面をマハラ彫りとし、後頭部を平彫りとする。白毫相を表わす。耳朶は環状。三道を表わす。条帛・天衣をかける(天衣は腹前を二段にわたる)。裙(折り返し付き)。腰布を着ける。左手は肘をわずかに曲げて、腹前に伸ばし掌を仰ぐ。右手は屈臂し、肩前で拳を握り、直立する。

#### 【構造】

頭体幹部はケヤキの一材製だが、背面及び地付きに多くの後補材があり、当初の構造の詳細は不明である。現状から復元的に考えるならば、頭体幹部は左肩先を含み一材製とし、右胸及び左前胸に別材を矧ぎ、頭部及び体部背面から内削りを施し、各蓋板を当てていたと推定される。

#### 【保存状態】

主な後補部は以下の通り。右腕の全て、左腕肘先、背面の背板相当部、右体側部下半、地付き部の大数材の補材、両足先。

#### (3) 伝虚空蔵菩薩立像(図4)

#### 【法量】

像高 153.4 髪際高 135.2

#### 【形状】

頭部及び体部上半の前面が後補のため、当初の形状は厳密には不明である。ただし、後頭部左方、左腕の肘付近及び下半身左方部が当初なので、本像が袈裟をまとう天部形として造られたことは確実である。

#### 【構造】

頭体幹部は一材製とみられるが、上半身前面から体部右側方にかけて大きく後補されており、当初の構造は不明である。

#### 【保存状態】

主な後補部は以下の通り。頭部前面及び右後頭部、上半身前面、右体側部、左肩、左体側部後半部、下半身前面右方、背面地付き部、地付き全体に貼られる薄板。

## II. 制作年代及び尊名

本三尊像の制作年代について考える。伝阿弥陀如来像の見せる、やや頭部を大きめにつくるプロポーションと上半身の重厚な塊量感は自ずと平安時代も早い時期の作例であることを示している。

体部前面の衲衣の折返し部分の縁をうねうねと翻らせるのは、京都・神護寺薬師如来像や福島・勝常寺薬師如来像など、九世紀像に多く見られる特色である。両肩を含めてケヤキの一材から造り出し背削りする方法も、茨城では八千代町仏性寺如来坐像に見られ、東北を例にすれば、岩手・黒石寺(貞觀四年<862>銘)や宮城・双林寺の薬師如来像と共通する技法であり、本像の制作年代はこれらの像と近い九世紀末に置くのが妥当と考えられる。

また、伝觀音菩薩像は全体にきわめて太造りであり、特にその胸部の塊量感が著しい点に特色がある。一方、伝虚空蔵菩薩像は後補部分が多いため造形から時代を判断することが難しいが、当初部分が残る左耳を見ると、その形状は意外なほど伝觀音像に類似している。また、背面の当初部分の造形も襞の起伏をデリケートに表わすなど優れた表現が残っている。中尊と伝觀音がともにケヤキ材を用いた重量感のある一本造りであることも考慮すれば、これら三尊は、一具同時の作とはいえないまでも、ともに近い時期に制作されたと見ることに無理はないと思われる。従って、その制作時期は三尊ともに九世紀末を基準として考えてよい。

本尊の制作年代をこのように推定したとき、まず伝阿弥陀如来像の尊名は、本像が左手を後補し右手も指先を直しているために印相を前提とはできない一方で、左脚を外に結跏趺坐することから、この時期に多く造られた奈良時代以来の足組を踏襲する薬師如来像とみることができる。そして、伝觀音菩薩像は、薬師如来像と一緒に像だったと仮定すれば、その脇侍の日光、または月光菩薩だった可能性が生まれよう。さらに、伝虚空蔵菩薩像は、当初から袈裟を着した天部形だったと見なされるため、これも奈良時代以来

の形式を踏襲する梵天または帝釈天だった可能性が高い。

妙法寺には、本三尊像の他にやはり平安時代も早い時期(十世紀と考えられる)に遡る四天王像四軀が随侍している(図5~8)。時間の都合で四天王像の概要については省略するが(註2), この四天王像を含めると、妙法寺現存像の当初の構成は、少なくとも薬師三尊像、梵天・帝釈天像、四天王像の計九軀によるものだったことが想定できる。この構成は、次に述べるように、奈良時代以来の官寺に備えられた尊種を完備するものであることが特に注目される。

### III. 妙法寺諸像と新治郡寺

妙法寺の草創は、寺伝によって延暦年間(782~806)に下野大慈寺の広智(註3)が創建し、天安年間(857~59)にはその弟子円仁が堂宇を改修したと伝えられるように天台宗との関わりが強調される。

妙法寺は、元亀年間(1570~73)に現在地櫻川市本郷に移ったと伝えるが、その原所在地は現在地より南方 750 メートルほどの地点である(註4)。ここで注目したいのは、その原所在地から西南西わずか 800 メートルの地にその寺址を残す新治廃寺である。

新治廃寺は昭和 14 年、高井悌三郎氏の発掘調査によって中門・金堂・講堂を南北に並べ、金堂の東西に塔を配置する奈良時代の特異な遺構であることがあきらかになった(註5)。そして、出土瓦が奈良時代末を下らないことから、この寺は、弘仁八年(817)十月の新治郡衙の火災(註6)に類焼し焼失したと考えられている。

新治廃寺がその地に再建されなかつたことは考古学の知見が示すところである。一方、妙法寺に九世紀から十世紀にかけての群像が伝わる事実は、この寺の前身寺院がこの規模の造像を担うる基盤を有していたことを示している。そしてこの群像の構成は、当時の公的な寺院が備える尊種をほぼ完備するものと見ることができる。

諸像のうち、坐形の薬師如来像は、平城京薬師寺金堂、新薬師寺などの奈良時代官寺の例をはじめ、平安京東寺金堂、丹波国分寺、佐渡国分寺など平安時代以降の官寺・国分寺に伝わる事例がある。奈良時代後半以降、国分寺及び官寺では減罪を企図し薬師悔過をしばしば勧修するようになるが、これらの薬師如来像はその本尊だったとみなされる。また、梵天・帝釈天は、東大寺法華堂、法隆寺食堂、唐招提寺金堂の現存例のように、四天王像と一緒にして造像された。奈良時代の四天王像は六斎日の持戒・三宝への帰依・父母への孝順・不殺生などを觀察し、違反者を懲罰する働きを持ち、また梵天・帝釈天はそれを統括する役割を担っていたと考えられる。ここから、薬師如来、並びに梵天・帝釈天・四天王像はすべて、減罪ならびに持戒のために働く尊種と位置づけられる。

国分寺は、建立の詔にあきらかなように、僧尼が毎月半ばに誦戒掲磨し、俗人は六斎日に不得漁獵殺生を維持する場であった。これらの尊像は、そのような国分寺に期待された機能に正しく応える像であったと見なすことができる。

以上から、妙法寺に伝来する諸像は、中央の制度に倣った公的な機能を有する寺院にこそ帰属するにふさわしい。ここから、妙法寺前身寺院を新治廃寺廢絶後の郡寺の機能を担つた寺として想定したい。

妙法寺は、新治郡において国分寺と機能的に類似する、中央に倣つた平地寺院がこの時期存在したことと推定させるのである。

### IV. おわりに

以上のとおり、妙法寺に伝来する平安時代九~十世紀の仏像を素材に、古代新治郡の宗教的環境を復原的に考えてみた。仏像は、文字資料、考古資料とはまた別な角度から歴史像を復原する重要な手段となると信じている。

翻って台渡里廃寺跡においても、觀音堂山地区に創建された初期寺院は九世紀後半に焼失、南方地区に新たに寺院が再建されたが、諸事情により造営を途中で止めたと理解されている(註7)。造営が途中で止められた理由はともかく、郡寺の機能を担った寺院と見られる妙法寺の存在から、台渡里廃寺の二つの寺院について、その性格を解明する手がかりを提供できると考えるものである。

## 註

- (1)妙法寺諸像は、茨城県教育委員会における平成16年度未指定文化財調査においてその重要性が認知された。その後、科学研究費基盤研究(A)「奥州仏教文化圏に遺る宗教彫像の基礎的調査研究」(研究代表者 有賀祥隆)の一環として、平成17年2月11・12日に調査を行った。この報告も調査時の合同調書にもとづくものである。
- (2)四天王像の概要については、別に刊行の調査報告書に譲る。科学研究費基盤研究(A)「奥州仏教文化圏に遺る宗教彫像の基礎的調査研究」報告書、平成18年3月刊行予定。
- (3)下野小野山寺、のち大慈寺の僧。はじめ鑑真の弟子道忠に師事、ついで最澄の弟子となり、のち下野国鎮国師となる。妙法寺のほか、東城寺を創めた最仙から寺を譲られるなど、常陸においても初期天台の有力僧の一人であった。
- (4)桜川市上野原にあり、地元の研究者であった藤田清氏は、妙法寺は新治廃寺の後身であるとの悲説もあり、址から古瓦が出土するといわれている。藤田清・中村盛吉『常総古文化研究』昭和47年、藤田安通志編・刊。
- (5)高井悌三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』昭和19年、桑名文星堂。
- (6)「日本後紀」弘仁八年冬十月癸亥条『日本略記』前篇十四。
- (7)川口武彦「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—国指定史跡「台渡里廃寺跡」範囲確認調査成果を中心に—」(奈良文化財研究所編・刊)『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』所収、2005年。

(茨城県文化財保護審議会委員)



図1 伝阿弥陀如来像



図2 同 背面



図3 右脇侍像



図4 左脇侍像



図5 四天王像 持国天像



図6 四天王像 增長天像



図7 四天王像 広目天像



図8 四天王像 多聞天像

## 台渡里廃寺跡関連文献(年代順)

- 中山 信名 1902 『新編常陸國誌』
- 東 白蘋 1909 『常總の戰蹟』水陽館
- 高井 梢三郎 1939 「王朝時代における地方統治と地方文化」『綜合郷土研究』上巻 茨城縣
- 大森 信英 1951 「茨城県東茨城郡山根村の窯跡群について」『上代文化』20 國學院大學考古學會
- 飯田 瑞穂 1952 「那珂郡家について」『史窓』5 水戸一高史學會
- 考古學會 1952 「墨書・籠書・刻印土器出土地名表」『考古學』第1卷第4號
- 伊東 重敏 1953a 「曝井は何處か?那珂郡衙と河内駅家考察(田谷廃寺址予報)」『ヒタチジ』9 常北考古學研究所
- 伊東 重敏 1953b 「曝井は何處か?那珂郡衙と河内駅家考察批判」『ヒタチジ』10 常北考古學研究所
- 伊東 重敏 1954 「那珂郡衙及び河内駅家考察の反省(1)」『ヒタチジ』11 常北古代研究會
- 藤田 清 1956 『常總古代文化第14號 古代瓦拓影特輯號』常總古代文化研究會
- 佐藤 次男 1956 「常陸風土記に於ける河内駅家・那賀郡家・曝井所在地論批判」『考古學』18
- 佐藤 次男 1957 「墨書・籠書・刻印土器出土地名表」茨城考古學會
- 高井 梢三郎 1959 「常陸台渡里廃寺出土の文字瓦」『史述と美術』29-8 史述と美術同攷會
- 大森 信英 1959 「古代地方都市の形成」『茨城考古學』2 茨城考古學會
- 豊崎 卓 1959 「常陸國那珂郡家の総合考察—古代の水戸—」『茨城大學文理學部紀要(人文科學)』10 茨城大學文理學部
- 大森 信英・大川 清 1962 『水戸市木葉下窯跡群三ヶ野第2号窯址発掘結果報告書』水戸市史編さん室
- 高井 梢三郎 1962 「台渡廃寺址」『日本考古學辭典』東京堂出版
- 飯田 瑞穂 1963a 「第四章 律令制下の水戸地方」『水戸市史』上巻 水戸市史編さん委員會
- 飯田 瑞穂 1963b 「渡里付近の奈良時代の遺跡」『水戸市史』上巻 水戸市史編さん委員會
- 高井 梢三郎 1964a 「常陸台渡廃寺跡・下總結城八幡瓦窯跡」宗藝舍
- 高井 梢三郎 1964b 「常陸台渡廃寺跡・下總結城八幡瓦窯跡」茨城県教育委員會
- 高井 梢三郎 1966 「常陸地方の古瓦についての覺書」『日本歴史考古學論叢』
- 佐藤 次男 1967 「水戸市台渡里廃寺址の土師器」『茨城県の土師器集成』第1集 茨城考古學會
- 住田 正一・内藤 政恒 1968 『古瓦』学生社
- 大森 信英 1968 「奈良時代中葉より平安時代初頭における郡衛ないしは郡寺を中心とした市域の形成について」『茨城史学』3 県立高校教育研究会歴史部
- 伊東 重敏 1971 「仏教文化時代 寺院跡」『水戸市埋蔵文化財基本調査報告書(応急版)』水戸市文化財調査報告第1集 水戸市教育委員會
- 伊東 重敏 1972 「奈良時代の水戸一台渡廃寺跡の瓦」『水戸の文化財拾遺』No.1 水戸市教育委員會社会教育課

- 伊東 重敏 1973 『常陸考古学研究所学報第15集 Site No.4761&4791 水戸地方における古代窯業の研究(その1 一序論)』水戸市木葉下町落合発見の遺構』常陸考古学研究所
- 森 郁夫 1973 「奈良時代の文字瓦」『日本史研究』136 日本史研究会
- 郡司 良一 1974 「水戸市田谷廃寺跡出土の鏡瓦」『考古学ジャーナル』No.99
- 森 郁夫 1975 「奈良時代における東国の寺院造営」『考古学雑誌』61-4 日本考古学会
- 伊東 重敏 1975a 「那珂郷 墨書き土器」『ひだみち』常陸考古学研究所
- 伊東 重敏 1975b 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廃寺跡出土古瓦総考』常陸考古学研究所
- 茨城大学考古学研究会 1976 『茨城大学周辺遺跡分布調査報告書II—那珂川流域における遺跡分布(土師器・須恵器・瓦編)』
- 郡司 良一 1976 「5.渡里地区 126.徳輪廃寺(台渡里)」『水戸市埋蔵文化財(分布調査報告書)』水戸市教育委員会
- 伊東 重敏 1976 「阿波郷銘文字瓦」『ひだみち』No.4 常陸考古学研究所
- 伊東 重敏 1977 「台渡出土瓦二題」『ひだみち』No.5 常陸考古学研究所
- 阿久津 久 1977 『特別展 茨城の古瓦』茨城県立歴史館
- 高井 第三郎 1978 「茨城の古瓦について」『茨城県立歴史館報』5 茨城県立歴史館
- 茨城県教育委員会 1979 「台渡里廃寺跡」『国・県指定史跡調査報告書』
- 桜井 康夫・杉山 惣一 1980 「III. 遺跡各説 13. 台渡里廃寺跡 Site.No.5181」『さらしい 第III・IV 合併号』茨城大学考古学研究会
- 杉山 惣一 1980 「IV. 総括 3. 歴史時代 (3) 瓦」『さらしい 第III・IV 合併号』茨城大学考古学研究会
- 川崎 純徳・鴨志田 篤二 1980 『原の寺瓦窯跡群発掘調査報告書』茨城県勝田市教育委員会
- 川崎 純徳・鴨志田 篤二 1981 『原の寺瓦窯跡群発掘調査報告書』茨城県勝田市教育委員会
- 阿久津 久 1981 「台渡里廃寺跡」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 黒澤 彰哉 1981a 「古瓦」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 黒澤 彰哉 1981b 「寺院跡」『茨城県大百科事典』茨城新聞社
- 阿久津 久 1982 「茨城県古代廃寺跡発掘の現状」『歴史手帖』10-10 名著出版
- 金井塚 良一・吉川 國男・星間 孝次 1982 『特別展 古代東国の覺—仏教文化の夜明けを探る—』埼玉県立博物館
- 茨城県立歴史館 1982 『特別展 茨城の書跡—文字から見た地方文化—』
- 小倉 京子・加藤 恵子・稻子谷 知子・黒沢 久子・馬場 裕子 1982 「III. 遺跡各説 8. 台渡里廃寺跡」『観音堂山地区 Site No.126』『さらしい 第V号』茨城大学考古学研究会
- 横倉 要次 1982 「IV. 総括 3. 歴史時代 一瓦について—」『さらしい 第V号』茨城大学考古学研究会
- 志田 謙一 1982 「常陸國郡寺」『季刊 明日香風』20巻 飛鳥保存財団
- 加藤 雅美・根本 康弘 1982 「シンポジウム 古代の常陸 木葉下遺跡」『第5回茨城県考古学研究発

表会要旨』茨城県考古学協会

- 根本 康弘 1983 『茨城県教育財団調査報告第21集 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書  
6 木葉下遺跡I(窯跡)』財団法人 茨城県教育財団
- 財団法人茨城県教育財団 1984 「木葉下遺跡」『年報』3
- 郡司 良一 1984 「126 台渡里廃寺跡」『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和58年度版』水戸市  
教育委員会
- 小河 邦男・川井 正一 1984a 『茨城県教育財団調査報告第26集 常磐自動車道関係埋蔵文化財発  
掘調査報告書8 木葉下遺跡II(窯跡)』財団法人 茨城県教育財団
- 小河 邦男・川井 正一 1984b 「木葉下遺跡E地点の13, 14, 15, 16号窯跡について」『年報』3 財団  
法人 茨城県教育財団
- 川井 正一 1984a 「木葉下遺跡(水戸市)」『第6回茨城県考古学研級発表会要旨』茨城県考古学協会
- 川井 正一 1984b 「水戸市木葉下窯跡群出土の須恵器」『菟玖波』創刊号 菊玖波の会
- 小河 邦男 1985 「木葉下遺跡須恵器窯の操業回数と操業期間について」『年報』4 財団法人 茨城県  
教育財団
- 高井 慎三郎 1985a 「第5章 第3節 人々の生活」『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 高井 慎三郎 1985b 「第5章 第4節 生産体制の確立」『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 高井 慎三郎 1985c 「第5章 第5節 奈良仏教の開花 那珂郡の寺院—台渡里廃寺跡・薬師平遺跡」  
『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 茨城県立歴史館 1985 『茨城県関係古代金石文資料集成—墨書・鎧書—』
- 茨城県立歴史館 1986 「木葉下窯跡群」『特別陳列 茨城の須恵器窯跡—窯跡にみる古代土器の生産  
と供給—』
- 森 郁夫 1986 「IV. 瓦の生産 3. 文字瓦」『考古学ライブラリー43 瓦』ニュー・サイエンス社
- 常磐女子高等学校社会科研究部 1986 「台渡里廃寺の鏡瓦」『社会科研究部報』2
- 久信田 喜一 1987 「古代常陸国那賀郡の郷について」『茨城史林』第11号
- 齋藤 忠 1987 「墨書き土器研究の意義」『季刊 考古学』18号 雄山閣
- 大川 清 1987 「文字瓦研究の方法」『季刊 考古学』18号 雄山閣
- 市毛 美津子 1987 『特別陳列 古代の寺「台渡里廃寺跡」』水戸市立博物館
- 青木 豊・内川 隆志 1987 「茨城県 台渡里廃寺 茨城県水戸市渡里町」『國學院大學考古學資料  
館要覽』1987 古瓦・國學院大學考古學資料館
- 辻 秀人 1988 「2. 東国の飛鳥、白鳳時代の瓦と寺院」『企画展 陸奥の古瓦』福島県立博物館
- 川井 正一 1988a 「台渡里廃寺出土の墨書き土器」『菟玖波』2 菊玖波俱楽部
- 川井 正一 1988b 「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』10 婆良岐考古  
同人会
- 黒澤 彰哉 1988 「常陸における古代寺院の一考察—各郡の造瓦活動を中心として—」『婆良岐考古』  
10 婆良岐考古同人会

- 瓦吹 堅 1988a 「常陸の古印」『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1988b 「水戸市台渡里廃寺覚書I—仏像范型を中心として—」『Shell Mound』3 東日本考古学同人会
- 森 郁夫 1988 『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 市毛 美津子 1989 「特別陳列 古代の寺『台渡里廃寺跡』」『水戸市立博物館報』4 水戸市立博物館
- 瓦吹 堅 1989 「水戸市台渡里廃寺覚書II—第2号住居跡を中心として—」『史峰』14 新進考古学同人会
- 廣田 長三郎 1989 『古瓦図考』 ネルヴァ書房
- 三舟 隆之 1989 「国分寺造営と地方豪族—国分寺系軒瓦の分布を中心として—」『駿台史学』75号 駿台史学会
- 井上 義安 1990 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡調査会
- 森 郁夫 1990 『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 大脇 潔 1991 「畿内と東国の初期寺院」『第5回企画展 東国の初期寺院—古墳時代から律令時代への動き—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 瓦吹 堅 1991a 「水戸市台渡里廃寺覚書III—般音堂山・南方・長者山地区の性格について—」『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 瓦吹 堅 1991b 「水戸市台渡里廃寺関係文字瓦覚書—『徳輪寺』銘を中心として—」『史碧』創刊号 新進考古学同人会
- 小森 紀男・松岡 貴直 1991 「II 東国の初期寺院 1 茨城県(常陸、一部下総の遺跡) (4)台渡里廃寺跡 No.15」『第5回企画展 東国の初期寺院—古墳時代から律令時代への動き—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 川井 正一 1992 「内原町藤田千軒遺跡出土の陶硯について—茨城県内出土陶硯集成—」『内原町史研究』創刊号 内原町史編さん委員会
- 井上 義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 外山 泰久 1993 「アラヤ前遺構(水戸市渡里町)をめぐって」『常総の歴史』13 岩書房
- 山中 敏史 1994 「第二節 評衡・郡衙成立の歴史的意義」『古代地方官衙遺跡の研究』 岩書房
- 茨城県立歴史館学芸部 1994a 「台渡里廃寺」『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994b 「木葉下窓跡」『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994c 「下入野遺跡」『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 茨城県立歴史館学芸部 1994d 「長福寺遺跡、北屋敷遺跡」『学術調査報告書4 茨城県における古代瓦の研究』
- 黒澤 彰哉 1994 『特別展 東国の古代仏教—寺と仏の世界—』茨城県立歴史館

- 井上 義安・千葉 隆司 1995 『水戸市台渡里廃寺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 佐々木 義則 1995 「木葉下窯跡群産坏A Iの変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『婆良岐考古』17 婆良考古同人会
- 土生 朗治 1995 「山田窯跡表採遺物について」『研究ノート』5 財団法人 茨城県教育財団
- 斎藤 忠 1995 「I解説 4寺院跡について (1)初期寺院と郡寺」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 川井 正一 1995 「I解説 5生産遺跡について」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 黒澤 彰哉 1995 「I解説 6古瓦について」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 高井 梅三郎 1995 「I解説 (ロ)寺院跡 6台渡里廃寺跡」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 川井 正一 1995b 「I解説 (二)生産遺跡 78木葉下窯跡群」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 鶴志田 篤二 1995c 「I解説 (二)生産遺跡 81原の寺瓦窯跡」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 鶴志田 篤二 1995b 「茨城県 台渡廃寺跡」『日本古代遺跡事典』吉川弘文館
- 田熊 信之他編 1995 『古瓦集成—宇野信四郎蒐集一』東京堂出版
- 久信田 喜一 1995 「第三章 第一節 律令制の成立と茨城町地方」『茨城町史』通史編
- 岡本 東三 1996 「三 山田寺式軒瓦と東国寺院」『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
- 井上 義安・栗原 芳子 1996 『水戸市台渡里遺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 水戸市教育委員会 1996 『水戸の指定文化財』
- 大川 清 1996 『古代のかわら』窯業史博物館
- 国立歴史民俗博物館 1996 『日本古代印集成「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書』
- 市毛 美津子 1996 「遠台遺跡採集の瓦塔について」『内原町史研究』5 内原町史編さん委員会
- 土生 朗治 1996 「山田窯跡表採遺物について」『研究ノート』5号 財団法人 茨城県教育財団
- 茨城県教育委員会 1997 「台渡里廃寺跡」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書IX(平成6・7年度)』
- 黒澤 彰哉 1997 「常陸国の初期寺院」『関東古瓦研究会第2回シンポジウム 関東の初期寺院資料編』関東古瓦研究会
- 大関 武 1997 「茨城県の古代寺院」第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景 第1分冊 発表要旨・資料(東日本編)』香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
- 佐々木 義則 1997 「木葉下窯跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心にして—」『婆良岐考古』19 婆良岐考古同人会
- 長谷川 武 1997 「国府と河内駅家間の古代官道について」『内原町史研究』6 内原町史編さん委員会
- 平川 南・永嶋 正春他 1997 『「非文献資料の基礎的研究—古印—」報告書 日本古代印集成』国

### 立歴史民俗博物館

- 平賀 康意 1998 『【特別展】常陸國風土記の世界—ひたみちの首長と民—』茨城県立歴史館
- 常陸古代窯業史研究会 1998 「水戸市山田窯跡群確認調査報告」『茨城県考古学協会誌』10 茨城県考古学協会
- 黒澤 彰哉 1998 「常陸國那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 川崎 純徳・鶴志田 篤二・神山 陽子 1998 『原の寺瓦窯跡発掘調査報告書(第四次)―1995年度原の寺瓦窯跡発掘調査の成果―』茨城県ひたちなか市教育委員会・茨城県ひたちなか市埋蔵文化財調査センター・ひたちなか市遺跡調査会
- 平川 南・永嶋 正春他 1999 『国立歴史民俗博物館研究報告第79集 日本古代印の基礎的研究』 国立歴史民俗博物館
- 井上 義安・蓼沼 香未由・仁平 妙子・根本 瞳子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 茨城県教育委員会 1999 「台渡里廃寺跡」『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書X(平成8・9年度)』
- 大橋 泰夫 1999 「古代における瓦倉について」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 黒澤 彰哉 1999 「新治廃寺の成立と画期―新治廃寺跡出土瓦の分析を中心にして―」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 池田 敏広 1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心にして―」『研究紀要』第7号 財団法人 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三舟 隆之 1999 「地方寺院造営の背景―七世紀後半の東国を中心として―」『史学雑誌』108編10号 史学会
- 赤井 博之 2000 「茨城県『古代仏教系遺物集成・関東―考古学の新たな開拓をめざして』考古学から古代を考える会
- 千葉 隆司 2000 「III 国府の影響を受けた瓦・台渡里廃寺」『第22回特別展 古代の瓦 常陸國府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 黒澤 彰哉 2000a 「瓦にみる常陸國分寺の造営」『第22回特別展 古代の瓦 常陸國府の瓦づくり』霞ヶ浦町郷土資料館
- 黒澤 彰哉 2000b 「常陸台渡廃寺と那賀郡衙」『文字瓦と考古学』国士館大学実行委員会
- 黒澤 彰哉 2000c 「(46) 常陸台渡廃寺と那賀郡衙」『日本考古学協会第66回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会
- 黒澤 彰哉 2001a 「瓦窯を歩く 瓦礫韓感」『ぶんかざいほごねんばう 2000 フィールドノート Vol.13』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 黒澤 彰哉 2001b 「V 考察 2.常陸國衙跡出土屋瓦の検討」『常陸國衙跡―石岡小学校温水プール

建設事業に伴う調査—』石岡市教育委員会

- 長谷川 武 2001 「常陸国における古代駅制の研究 とくに国府・安侯・河内駅家間の直線道について」『郷土文化』42 茨城県郷土文化研究会
- 森 郁夫 2001 「第三章 文字や絵のある瓦」『ものと人間の文化史 100 瓦』法政大学出版局
- 大川 清 2002 「三 地方寺院・官衙の造瓦組織 (三)常陸台渡廃寺」『古代造瓦組織の研究』日本窯業史研究所
- 栗原 淳 2002 『第44回企画展 乙女の古代瓦と下野国』小山市立博物館
- 上原 真人 2002 「奈良時代の文字瓦」『行基の考古学』県河原古代寺院研究会編 塗書房
- 黒澤 彰哉 2002 「第1章第5節 常陸国成立 三 仏教の奨励と統制 台渡廃寺の文字瓦」『岩間町史』岩間町
- 稻田 義弘 2002 「金付着土器について」『研究ノート』11号 財団法人 茨城県教育財团
- 水戸市教育委員会 2002 『台渡里廃寺跡範囲確認調査現地説明会資料』
- 川口 武彦・沼沢 香未由 2002 「台渡里廃寺跡」『第24回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦 2003a 「台渡里廃寺跡観音堂山地区探集の古瓦—凸面に櫛描波状文を有する平瓦—」  
『考古学ジャーナル』No.497 ニューサイエンス社
- 川口 武彦 2003b 「台渡里廃寺跡観音堂山地区出土の古瓦と土器一小國江 好氏所蔵資料の紹介  
—」『斐良岐考古』25号 斐良岐考古同人会
- 川口 武彦 2003c 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡観音堂山地区」『設立25周年記念講演会資料・第  
25回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦・渥美 賢吾 2003 「木葉下窯跡群における窯業生産の展開(1)一堂の内茅場・細入両窯跡  
を中心に—」『茨城県考古学協会誌』15号 茨城県考古学協会
- 志賀 崇 2003 「Ⅲ 官衙建物の遺構 Ⅲ-9 瓦葺建物の比率と時期」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』  
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 鴨志田 篤二 2003 「茨城県原の寺瓦窯跡とその周辺」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論  
文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
- 水戸市教育委員会 2003 『茨城県指定史跡台渡里廃寺跡観音堂山地区—平成15年度範囲確認調査  
現地説明会資料—』
- 黒澤 彰哉 2003 『よみがえる古代の茨城』茨城県立歴史館
- 三舟 隆之 2003 『日本古代地方寺院の成立』吉川弘文館
- 浜田 晋介・望月 一樹・吉野 真由美 2003 「3.郡の名がついた寺院 台渡里廃寺跡」『古代を考える  
I 郡の役所と寺院』川崎市市民ミュージアム
- 川口 武彦 2004 「茨城県水戸市山田窯跡群出土の大形瓦製品」『筑波大学先史学・考古学研究』15  
号 筑波大学歴史・人類学系
- 佐々木 義則 2004 「寺院と役所の造営」『図説 水戸・笠間の歴史』郷土出版社

- 川崎 純徳・岡本 東三・黒澤 彰哉・後藤 道雄・小松崎 博一・川口 武彦 2004 「茨城県指定史跡台渡里廃寺跡観音堂山地区の調査と課題」『日本考古学協会第70回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 蓼沼 香未由・川口 武彦・池田 敏宏・瓦吹 堅・黒澤 彰哉・渥美 賢吾 2004 『台渡里廃寺跡一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口 武彦・渥美 賢吾 2004 「木葉下窯跡群における窯業生産の展開(2)——細田、打越、四又入窯跡群を中心として——」『茨城県考古学協会誌』16号 茨城県考古学協会
- 川口 武彦・小松崎 博一 2004 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡観音堂山地区」『第26回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 水戸市教育委員会 2004 『茨城県指定史跡台渡里廃寺跡—平成16年度範囲確認調査現地説明会資料一』
- 稻田 健一 2004 「常陸国の7世紀—古墳を中心に—」『第5回大学合同考古学シンポジウム 古墳から寺院へ—関東の7世紀を考える— 予稿集』大学合同考古学シンポジウム実行委員会
- 山中 敏史 2004 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心に— 研究報告資料』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究
- 川口 武彦 2004 「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—茨城県指定史跡「台渡里廃寺跡」範囲確認調査成果を中心に—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心に— 研究報告資料』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究
- 川口 武彦 2005 「瓦のふるさとを求めて—木葉下窯跡群を歩く—」『ぶんかざいほごねんばう』2004 フィールドノートVol.17 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 小松崎 博一 2005 「台渡里廃寺整理日誌」『ぶんかざいほごねんばう』2004 フィールドノートVol.17 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 須田 勉 2005 「多賀城様式の瓦の成立とその意義」『国士館大学文学部人文学会紀要』第37号 国士館大学文学部
- 須田 勉 2005 「多賀城様式瓦の故地」『古代東国の考古学一大金宣亮氏追悼論文集—』慶友社
- 川口 武彦・小松崎 博一・新垣 清貴編 2005 『台渡里廃寺跡 範囲確認調査報告書』水戸市教育委員会
- 土生 朝治・川口 武彦・新垣 清貴 2005 『台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一』水戸市教育委員会
- 川崎 純徳・岡本 東三・黒澤彰哉・後藤 道雄・小松崎 博一・川口 武彦・新垣 清貴 2005 「(35)茨城県指定史跡台渡里廃寺跡の調査と課題」『日本考古学協会第71回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 大津 郁子 2005 「台渡里廃寺跡出土の遺物について—水戸市立博物館寄託資料の紹介—」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会

- 文化庁文化財部 2005 「新指定の文化財(無形文化財・記念物) 台渡里廃寺跡」『月刊文化財 9／平成 17 年』第 504 号 第一法規株式会社
- 川口 武彦・新垣 清貴 2005 「茨城県指定史跡 台渡里廃寺跡」『第 27 回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 川口 武彦 2005a 『台渡里廃寺跡の文字瓦—辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告—』(明治大学古代学研究所研究会当日配布資料)
- 川口 武彦 2005b 「常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—国指定史跡「台渡里寺跡」範囲確認調査成果を中心に—」『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 中山 敏史 2005 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題—氏寺論の再検討—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 志賀 崇 2005 「郡衙周辺寺院の性格—考古資料を用いた分析への展望—」『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2005 『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』
- 川口 武彦 2006a 「古代常陸国の郡衙周辺寺院出土陶製相輪考—つくば市北条中台遺跡出土有孔浅鉢形須恵器の再評価—」『茨城県史研究』第 90 号 茨城県立歴史館
- 川口 武彦 2006b 「台渡里廃寺跡の文字瓦—辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告(1)—』『明治大学古代学研究所紀要』1 号 明治大学古代学研究所
- 川口 武彦 2006c 「常陸国の郡衙周辺寺院における礎石建物の調査手法と課題—国指定史跡「台渡里廃寺跡」の調査を中心に—」『帝京大学山梨文化財研究所古代考古学フォーラム 2006 摨立柱・礎石建物建築の考古学—官衙・集落・寺院におけるその分析と研究法—』
- 菱田 哲郎 2006 「古代日本における仏教の普及—仏法僧の交易をめぐって—」『考古学研究』52-3 考古学研究会
- 中山 敏史 2006 「郡衙および官衙関連遺跡をめぐる諸問題」『静岡県考古学会 2005(平成 17)年度シンポジウム 古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—』静岡県考古学会
- 小川 和博・大瀬 淳志・松谷 真子・川口 武彦 2006 『台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 大橋 生・佐々木 藤雄・川口 武彦・林 邦雄・渥美 賢吾 2006 『台渡里廃寺跡 一市道常磐 17 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—』水戸市教育委員会

(川口武彦作成)

国指定記念シンポジウム  
台渡里廃寺跡を考える  
資料集

印 刷 平成18年3月20日  
発 行 平成18年3月24日  
編集・発行 水戸市教育委員会  
水戸市中央1-4-1  
TEL 029-224-1111 (内線542)

